

らす音や、跳ね飛ばす水の音や、叫喚き聲で響き渡つた。キリユーは咳拂ひをして笑つた。さも誰かに水中へ引き込まれる様な、苦しい叫び聲を出した。ドゥイモーフは其の跡を追ひかけて、逃げる男の足を捉へようとした。

「グ、グ、グー！」と彼は叫んだ。「捉へろ、放すな。」

キリユーはアハハ笑つて、喜んで居た。けれど顔の表情は、陸上のそれと變らなかつた。誰か彼の後から急に其の頭を抱きかゝへた時の様な、眩惑したといった様な魯頓な表情をして居た。エゴールシカも、やはり着物を脱いだ。彼は岸を下つて行かずに、飄け廻つて居たが、急に一間半位の高さに飛び上つたと思ふと、空中で弧形を描いて水中に落ちて行つた。深く沈んで行つたけれど底までは達しなかつた。或る冷たい、快い觸感の力が彼をひつ捉へて、上方へ連れ戻つた。水中から顔を出した彼は、頻りと鼻を鳴らし、飛沫を吹きながら、兩眼をバツと開けた。川では丁度彼の顔の近くで、太陽が強く照り返して居た。最初眩しい様な閃光が、次いで虹と暗い斑點が眼を射つた。彼は再び潜つた。水中で眼を開けた時、濁つた緑色の丁度月夜の空に似た様な色を見た。再び同じ様な力が、底に觸れた涼しい處に留つて居ることを許さないで、其のまゝ上方へ拉し去つた。彼は水面から頭だけ出して深い深い溜息を吐いた。そ

れで胸ばかりでなく、腹の中までが、溜々と涼しくなつて來た。やがて水から取り得るだけのものを悉く取り盡してやらうと贅澤を盡した。先づ仰向けに横はつて甘つたれたり、水を跳ね飛ばしたり、とんぼ返りしたり、匍つたり横向きになつたり、まな仰向けになつては泳いだり、立ち泳ぎをしたり、疲れるまで勝手放題なことをした。向ふ岸には蘆が密生して居た。日を受けて金色に光つて居る。蘆の花は美しい房の様に、水面に垂れて居た。或る場所で蘆が慄へた。穂を垂れてビチビチ鳴つて居た——ステブカとキリユーが蟹を釣り上げて居たのだ。

「蟹だ！ 見ろ、蟹だ！」と、キリユーは誇り氣に叫び出した。そして眞實に蟹を見せた。

エゴールシカは蘆の方へ泳いで行つて潜つた。そして蘆の根の附近で悪戯け始めた。柔らかな滑々とした泥濘の中に潜つた時、何か鋭い厭なものに觸れた。或は眞實の蟹だつたかも知れぬが、此の時誰か彼の片足を捉へて上の方へ引き上げた。啞びながら、咳をしながら、エゴールシカは眼を開けた。そして自分の前に、濡鼠になつたドゥイモーフの笑顔を見た。液分曉漢は重々しい息遣ひをして居た。眼色で判断すると、どうも悪戯でもしさうだつた。しつかりとエゴールシカの片足を握つた上に、尙ほ片手を伸ばして、其の首を捉へようとした。エゴールシカは憎くさは憎くし、怖はさは怖はし、うつかりしてまた剛力の奴に、水の中へでも押し込

まれちや大變だと、巧く其の手から抜けて、

『馬鹿野郎！ 頬邊擲ぐるぞ！』と呟いた。

これだけちやまだ嫌味が言ひ足らぬと感じてか、一寸考へた後更に付け足した。

『可厭な奴！ この犬ころ奴！』

けれどもドゥイモーフは今のことも忘れてエゴールシカにはもう氣を配つて居なかつた。そしてキリユーハの方へ泳いで行つて叫んだ。

『グ、グ、グー、魚を捕へようちやねえか！ 皆で魚を捕へよう！』

『よしてきた。』とキリユーハは同意した。『屹度其所にや、魚が澤山居るに違えねえ……』

『ステブカ、村へ一走り走つて行つて投網一つ百姓の所から借りて來な！』

『貸すもんだか！』

『貸すとも！ 行つて頼んで見い！ 行つたら村の者に言ふんだぞ、基督の爲めだから、俺等假令旅の者だつて構はねえちやねえかつて。』

『そりや違えねえ！』

ステブカは水中から匍ひ出して、急いで着物を着ると、帽子も被らずに、廣いスポンをダブ

つかせながら、村の方へ走つて行つた。ドゥイモーフと衝突してからは水はもうエゴールシカにとつて、一切の美を失つた。彼は匍ひ上つて着物を着始めた。

パンテレイとワーシヤとは険しい岸の上に、足をブラリと垂れたまゝ腰かけて、泳いで居る人たちを眺めて居た。岸際には、膝まで水中に浸つた、裸のエメリヤンが立つて居た。落ちない様に、片方の手で草を握つて、片方の手で自分の身體を擦つて居た。其骨張つた兩肩、眼の下の瘤、縮こまつて水を怖がつてゐる様子が如何にも可笑しな形に見えた。顔は眞面目で嚴格だつた。憤怒つた様に水面を視つめて居た。嘗てドン河が自分に風邪を引かせて、音聲までも奪ひ取つてしまつたことを思ひ出して、ブリブリして居る様だ。

『お前さん、何故水浴びしないんだ？』とエゴールシカはワーシヤに訊いた。

『何アに、浴びたくねえからさ……』とワーシヤは答へた。

『如何してそんなに顔が脹れて居るんだ？』

『痛えんだ……俺はな、マツチ工場で働いて居ただよ……マツチ工場で働くと顔の骨が張れるつて醫者が言つただ。工場が健康に良くねえだよ。俺の外にもまだ三人顔を脹らせた奴が居らア。一人のなんか丸つきり腐つちやつただよ。』

間もなくステブカが網をかゝへて戻つて来た。ドゥイモーフとキリユーハは齧り長く水中に浸つて居たものだから、薄紫色になつた。聲も嘎れた。が、喜んで魚捕りにかつた。最初彼等は蘆に沿うて深い所を行つた。その邊はドゥイモーフの首つたけあつた。短身のキリユーハは、頭まで浸つて居た。嗜んだり飛沫を吹いたりした。ドゥイモーフは、棘ばつた根に躓いて倒れた。そして投げ網にからまつた。兩人ともバタバタ暴れだした。彼等の魚捕りは結局悪戯で終つた。

『深えよ。』とキリユーハは嘎れ聲で言つた。『何が捕まるもんだか！』

『引つ張るな、馬鹿野郎！』とドゥイモーフは網の位置を直さうとしながら叫んだ。『兩手で持てつたら！』

『そんな所で、何が捕れるもんだ！』と、パンテレイは岸から彼等に向つて叫んだ。『ただ魚をおどかさばつかりだ。魯鈍な奴等だなア！ 左の方へ寄つて見る！ 其處の方がズーツと淺えよ！』

一度大きな魚が網の上で光つた。一同吃驚した。ドゥイモーフは魚の逃げた後を拳固でぶんどつた。彼の顔には失望の色がさした。

『えゝ！』とパンテレイは叫んで兩足を踏み鳴らした。『ぼんやりして居るからだ。チカマス（魚の名）だ！ 其方へ逃げたぞ！』

左の方へ寄りながらドゥイモーフとキリユーハとは段々浅い所へ出た。其所で漸く本當の魚捕りが始まつた。荷馬車から其處まで二百歩ほど離れて居た。彼等が黙り返つて、僅に兩足だけを動かしながら、行けるつたけ深い方へ、岸の方へ近寄つて網を投げたり、網へ魚を連れ込む爲めに兩岸で水面を打つたり、蘆をサラサラさせたりして居るのがよく見えた。蘆の生えて居る所から段々向ふ岸の方へ歩いて行つた。此處で網を曳いて、やがてがっかりした様な好で膝を高く上げながら、また蘆の方へ戻つて来た。何か彼等は語り合つて居る様だ。が、何事か話して居るのか聞きとれなかつた。日は彼等の背中を焼きつけて居る。蠅も刺す。彼等の體は、薄紫色から蒼白に變つた。彼等の後ろからバケツを手に掲げて、腋の下に下着を挿み込んで、裾を口に咬へながらステブカが歩いて行つた。巧く捕へる度に彼は種々雑多な魚を高く差し上げて、日向にそれを光らせながら叫んだ。

『見る、大かいチカマスぢやねえか！ こんな奴がもう五匹も捕れるといふだがなア！』
網を引上げる度にドゥイモーフとキリユーハと、ステブカとが、暫らく距離の中にぬかつた

まゝ何かバケツに入れたり投げ出したりして居るのが見えた。網にかゝつた何かを、時々手から手に渡して、珍らし相に眺めた後で、同じ様に投げしまふこともあつた。

『彼處に見えるのは、ありや何だ?』と岸の上から彼等に向つて叫んだ。

ステブカは何か答へたけれど、全く聞き取れなかつた。やがて彼は水中から筒ひ出して、両手にバケツを提げて、下着を垂れたまゝ馬車の方へ駈つて來た。

『もう一パイだ!』とステブカは苦し相な息づかひをしながら、『別なのを貸してくれ!』と叫んだ。

エゴールシカは寄つて行つてバケツの中を覗いて見た。バケツはもう一パイだつた。水中から若いシチユーカ(魚の名)が醜い顔突き出した。其の傍では蝦や小魚が騒いで居た。エゴールシカは底の方へ手を挿し込んで、水を揺り上げた。シチユーカは蝦の下へ姿を消した。其の代りにオクーニ(魚の名)とリーニ(魚の名)が浮き上つた。ワーシヤも矢張り同じ様にバケツの中を覗き込んだ。兩眼は膩ぎつて居る。丁度以前狐を見た時の様な愛嬌のある顔付をして居た。彼は何かしらバケツの中から引き上げて、口の處へ持つて行つたと思つたら、もう嚼み始めた。

ムシャノといふ音が聞え出した。

『兄弟たち!』とステブカは吃驚して叫んだ。『ワーシヤはビスカーリ(魚の名)を生きたまんま食べてるぜ! 驚いたね!』

『これはビスカーリぢやねえ、ポプイリーク(魚の名)だ。』とワーシヤは済まして嚼み續けた。

彼は口中から魚の尾を抜き出した。愛嬌よくそれを眺めて、また口の中へ挿し込んだ。嚼んで居る間、齒ががりがり鳴つて居た。エゴールシカは自分の前に立つて居るワーシヤを人間ぢやないと考へた。ワーシヤの膨れた頬、曇つた眼、鋭い視力、口中の魚の尾、ビスカーリを嚼んで居た時の愛想づかひが、如何にも彼を動物化してしまつたのだ。

エゴールシカは、彼の側に居るのが、厭になつて來た。それに魚捕りも、もう済んだので、馬車の附近をぶらぶらしながら、考へ込んで居たが、愈々堪らなくなつて、村の方へ徐かに歩き出した。

暫らくすると、彼はもう會堂内に居た。額を誰かの麻臭い背中に載せて、合唱に聴きとれて居た。禮拜はもう終りかゝつて居た。エゴールシカには合唱の歌の意味が解らなかつた。だか

ら歌を聴いて居ても平氣であつた。少しばかり聴いては欠びした。そして人々の後頭部や背中を凝視め始めた。先刻の水浴の爲に濡れた人衆色の一つの後頭を見てそのエメリヤンだといふことに氣がついた。後頭部は弧形に刈り込んであつた。それが普通よりもすつと上の方まで刺つてあつた。額も同様、餘計な所まで刈りとりつてあつた。紅くなつた兩耳が突つ立つて居た。丁度二つのロプーハ（植物の名）の様に。それも普通の人とは違つた所に附着して居る様と思はれた。後頭部と兩耳とを見ただけで、何故だかエゴールシカはエメリヤンが甚だ不幸な人間だと考へた。彼の指揮振りや、暖れ聲や、水浴の際の臆病な様子などを想ひ出して氣の毒で堪らなかつた。何とか一つ、愛想よい言葉でもかけてやりたくなつた。

『あ、僕も此處に来て居るよ！』とエゴールシカは彼の袖を引つ張つた。

合唱の時、テノルやバスで歌ふ人たち、特に一生涯に一度でも合唱の指揮を取つたことのある人々は、子供たちを無暗と嫌がるものだ。彼等は此習慣を歌手を廣めてからも變へない。エゴールシカの方を振り返つたエメリヤンは、上眼をつかつて窺き込んで言つた。

『會堂の中で戯けちやいけねえ！』

やがてエゴールシカは、聖障の方へ近く／＼進んで行つた。其所でも亦妙な人達を認めた。

群衆の前の方で右手の敷物の上に一組の男女が立つて居た。その後方に椅子が二つ並んで居た。男の方は綺麗にアイロンをかけた絹袖の服を着て、丁度上官に敬禮して居る兵卒の様に、不動のまゝ起立して居た。そしてそりたての青くなつた顔を高く張り出して居た。其立襟の中にも、顔の青い中にも、小さな禿の中にも、杖の中にも過分な威厳が感じられた。威厳があり餘つて顔が緊張して居た。顔も非常な力で上へ引つ張り上げられて居た。今にも顔が腫れて、上へ飛んで行き相な恰好だつた。之れに反して婦人の方は、肥太つた、老衰した女だつた。白色の絹織の肩掛をかけて、顔を少しく側方に傾けて、丁度他人の世話をしつてやつて、「何アに、御禮どころではありません、そんなこととして戴いては、却て困ります……」とでも言ひた相な恰好で視つめて居た。敷物の周囲には小ロシアの百姓共が、厚い壁を作つて、立ち並んで居た。

エゴールシカは聖障の方へ近寄つて行つて、聖像に接吻し始めた。緩くり聖像一つ／＼に跪座づいて、床に頭を擦りつけた。床上に跪座づいたまゝ、後ろの人たちを見廻した。それから起つて接吻した。顔を冷たい床に觸れることが彼に大なる満足を與へた。祭壇の奥から、番人が燈明を消しに、長い鋏を持つて出て來た時、エゴールシカは迅速に床から起き上つて、その男の方へ走つて行つて訊いた。

『聖麴類はもう分けて了つたの？』

『ない、ない、……』と不興氣に番人は呟いた。『何もありません……』

禮拜は済んだ。エゴールシカは徐かに會堂を出て、廣場を彷徨つき始めた。今までに、澤山の村や、廣場や、百姓たちを見たのだけど、今彼の眼に映つたものは何一つとして彼を慰めるものがなかつた。暇つぶしに何か始めようかと考へても、別にすることがない。そこで彼は近所の店へ立ち寄つた。店の戸の上に、赤い綾織の廣い條が懸つて居た。店は廣々として薄暗い二つの部に仕切られてあつた。一方の店では、赤い反物や雜貨類を賣つて居た。他の部分では樹脂を填めた樽が並んで居たり、馬具が天井に掛つて居たりした。其の店頭では、革類や樹脂の甘ま相な匂がして居た。店の床上には、隈なく水が撒かれて居た。偉い妄想家と自由思想家とが撒いたものと見えて、模様や神秘的な記號が床一面に描かれて居た。店棚の蔭の帳場に腹を凭らせかけて、廣顔の圓味を有つた顯辯を生やした、見たところ大ロシア人らしい、肥太つた店主が立つて居た。棒砂糖を嚙りながら紅茶を飲んで居る。呑み込む毎に、深い嘆息を漏らした。顔は極めて無頓着な表情を現はして居た。嘆息する毎に「暫く待ちねえ、今にきめつけてやるから！」といふ様に聞えた。

『日向葵の種を一錢あておくれ！』とエゴールシカは彼に向つて言つた。

店主は眉を上げて、店棚の蔭から出て來た。そしてエゴールシカのポケットに一錢文日向葵の種を注ぎ込んだ。其時の升の役をしたのは香油の空罐だつた。エゴールシカは去り兼ねて、何時までも蓋餅入り箱を眺めて居たが、年經て徴が吹き出て居る小さいウセムスキーの蓋餅を指しながら訊いた。

『この蓋餅は幾何する？』

『一錢に二つだ！』

エゴールシカは昨日ユダヤ女から貰つた蓋餅をポケットから取り出して尋ねた。

『この位の蓋餅は、お前さんの所で幾何する？』

店主は兩手にその蓋餅を受け取つて、あつちからもこちからも眺めて居たが、やがて一方の眉を上げて、

『この位えのか？』と彼は訊いた。

それからまた他の眉を上げて、一寸考へたが、

『二つで三哥だ……』と答へた。

兩人とも暫らく沈黙して居た。

『お前さん誰の子だ？』と店主は赤銅の茶器から茶を自分のコップに注ぎながら訊いた。

『イワン・イワヌイチの甥だ。』

『イワン・イワヌイチだつても澤山居らア。』と店主は溜息を吐いた。

エゴールシカの頭越しに店先の方を見て、少し沈黙まつて居たが、

『お茶、欲しかアねえか？』と店主は訊いた。

『飲んでもいゝや！』と、エゴールシカは朝の茶が非常に欲しかつたのに、何となく氣の進まぬ返事をした。

店主はコップに茶を注いで、嚙りかけた砂糖と一緒に與へた。

エゴールシカは折り畳みの出来る椅子に倚つて、茶を飲み始めた、彼は砂糖漬けのミンダリが一フント幾何するか尋ねたかつたので、それを話しかけると、そこへ丁度新しい客が一人店頭にはれた。主人は側の方に自分のコップを置いて、客を樹脂臭い方へ連れて行つた。そして長いこと何か相談し合つて居た。買手は如何にも頑固な、自分の損得なら決して忘れない風の人らしかつた。不同意らしく頻りに頭を左右に揺つて居たが、遂々扉の方へ引き返して來た。

主人は何か説き伏せられたらしい。そこで大きな袋の中へ燕麥を穿、始めた。

『何アに、これが燕麥だつて？』と買手は悲し相に言つた。『こりや燕麥ぢやねえ、糠殻だ、

鶏だつて食べるものか……要らねえよ、ボンダレンコの店へ行かア！』

エゴールシカが河へ戻つて來た時は、岸の上に小さな焚火が煙つて居た。馭者等が食事の仕度をして居るのだ。煙の中にはステブカが立つて、大きなギザギザのある匙で、鍋の中をかき廻して居る。少し脇の方には、煙の爲めに眼を赤くしたキリユーハとワーシヤとが腰を下して魚を洗つて居た。二人の前には泥土や藻だらけの投げ網が轉がつて、其の網の上に魚が一匹光つて居た。蟹も幾つか匍つて居る。少しばかり前に會堂から戻つたエメリヤンはパンテレイと並んで坐つて居た。彼は手を振りながら、辛うじて聞える位な囁れ聲で、「神に歌はん……」といふ讚美歌を謳つて居た。ドゥイモーフは放つた馬の附近を彷徨いて居た。

キリユーハとワーシヤとは魚と生きた蟹とを洗ひ終るとベケツの中へ拾ひ集めて、一旦水を注いだ後でまた取り出して、煮えたぎる熱湯の中へ悉く投げ入れた。

『油を注さうか？』とステブカは匙で泡を除けながら問ふた。

『何故だ？ 魚は自分でダシを出さアね！』とキリユーハは答へた。

鍋を焚火からおろす前に、ステブカは湯の中へ粟を三握と鹽を一匙入れて、試食しながら、舌鼓を打った。それから匙を嘗めて、さも満足げに叫んだ。

『こりやとても、いゝカーシャ（粥）が出来たぞ！』

パンテレイの外の連中は皆な来て、鍋の周圍に陣取つて、匙を使ひ始めた。

『これ〜、小僧にも匙をおやり！』とパンテレイは厳しく注意した。『矢張り食べたからうからなア！』

『俺等の食ふもなア、百姓式だからなア……』とキリユーハは太息を漏らした。

『百姓式だつても、身體の爲めになるだからなア、若し食べてえと云ふんなら……』

と、エゴールシカに匙を渡した。エゴールシカは坐りもせず、鍋の側に立つたまま、穴の中でも窺き込む様にして其の中を眺めながら食べ始めた。カーシャは生魚の臭がした。粟の中には魚の鱗も澤山混つて居る。蝦は匙に引つかゝつて來ない。そこで皆な鍋の中からそれをいきなり手で掴み出して居た。ワーシヤは特に平氣でそれをやつて居た。カーシャの中で手を濡らすだけならまだしも、袖まで濡らしてしまつた。だが、兎に角カーシャは頗る美味しいものだ、と、エゴールシカは考へた。さうして居る中に何時かまた蝦のスープを想ひ出した。それは精進の

日に母親が自宅で作つてくれたものだ。パンテレイは側の方で、腰かけたままパンを獨りで嚼つて居た。

『爺さん、お前、何故食べねえだ？』とエメリヤンが彼に尋ねた。

『俺は、蝦を食べねえだ……いや、眞平だ！』と、パンテレイは忌々しさうに後ろを向いてしまつた。

一同揃つて食べて居る間、共通的な話はずんで居た。エゴールシカは、この新しい知合の人達がどれもこれも、年齢から云つても性格から見ても各自非常な相違があるにも拘らず、其話の中には一般に甚だ共通な點があるのに氣が附いた。彼等は各々美しい過去と醜い現在とを有つて居ることに於て酷似して居るのだ。誰一人として自分の過去を悦んで話さなかつた者は居なかつた。そして現在に對しては、殆んど侮蔑的な態度を執つて居た。ロシア人は追憶が好きで現實を愛さないといふことを、エゴールシカはまだ知らなかつた。で、カーシャをまだ食べ盡さない中に彼はもう深く信じた——鍋の周圍には、辱かしめられた人々、運命に虐げられた人々が坐つて居るのだと。パンテレイは語つて聴かせた——まだ鐵道のなかつた時分彼は荷馬車の縦列と共にモスクワやニージュニーへ通つたものだ。そして使ひきれない程の金儲けを

したと言つて其時分の商人のことや、どんな魚があつたかといふことや、何でも凡てがズツと安價だつたことを話した。ところが方今は道が愈々短くなり、商人等は益々吝になり、農民は一層貧しくなり、パンがうんと高價になり、凡てが細かく極端まで約まつたことを話した。エメリヤンもまた語つた——彼が以前ルガンスキー工場に、歌手として勤めて居た頃は、素敵な聲を有つて居て、樂譜を読むことにも優れて居た、が、今は百姓に變つてしまつた。そして兄弟のお情けで食つて居る、兄弟が自分の馬を貸してくれたのだ、その代り働いた半分は兄弟に取られてしまうとのことだ。ワーシヤは嘗てマツチ工場に勤めて居た。キリユーへはい、所の人の取者として働いて居た。其地方きつて一番の評判者だつた。ドゥイモーフは富裕な農家の息子で我儘に育つた、遊んでばかり居て、苦勞といふものを知らなかつた、それが二十歳になるかならない中に、嚴格な、強情な親父は彼に何か仕事を仕込まうと思ひ、彼が家で甘つたれない様に心配して、水吞百姓と同じ様に運送業に従事させた。獨りステバカばかりは黙つて居た。だが、その無鬚の面相から判断すると、以前は今よりも、もつとすつと樂な暮しをして居た様に察せられた。

親父の事を思出したドゥイモーフは食べるのを止めて顔を曇めた。彼は仲間たちを上眼で見

た。そして視線をエゴールシカの處で留めた。

『此の異教徒奴、帽子を脱れつたら！』とドゥイモーフは荒々しく云つた——『帽子を被つたまゝ食べる奴があるか。旦那だつても、被つちや食べねえ！』

エゴールシカは帽子を脱いだ。そして言も口に出さなかつた。けれど、もうカーシヤの味が解らなくなつた。パンテレイとワーシヤとが彼に加勢をしてくれたのさへ耳に入らなかつた。夜分曉漢に對する反感が小さい胸の中でガラ／＼湧き返つた。兎に角何とかして仇をとつてやらうと決心した。

食事後一同荷馬車の方へブラ／＼歩き出して、日蔭に滑り込んだ。

『爺さん、もう直きに出かけるの？』とエゴールシカはパンテレイに尋ねた。

『都合の好い時分出かけるだ……まだ熱いから出かけやしねえ……どうせ成るやうにしか成らねえだ……まあ横になんか、えゝ！』

間もなく荷馬車の下から駢聲が聞えて來た。エゴールシカはまた村へ行きかけたが、暫らく考へて、欠びをした。そして老爺さんと並んでゴロリ横になつた。

六

荷馬車の縦列は終日河畔に停まつて居た。そして太陽が西へ没した頃動き出した。

エゴールシカはまた梱包の上に横はつて居た。荷馬車は静かに軋りながら揺れて居る。下の方を見ると、パンテレイが例の調子で歩いて居る。足を踏みつけたり、髻の邊を叩いたりして呟いてゐた。空中では昨日の様に曠野の音楽が鳴り渡つて居る。

エゴールシカは仰向けになつて、両手を頭の下に敷いて上空を眺めた。夕焼けの燃え始めから其の消え終るまで、袂氣よく眺めて居た。守護者の天使等は黄金色の翼で地平線を覆ひながら眠りに就いた。一日は無事に済んで、静かな、穏やかな夜が来た。天使等は安心して天上の宿に坐つて居ることが出来た……エゴールシカは段々と暮れてゆく空の模様、夕靄が地上に降りて来る様子、一つ二つと星が輝き出す光景を眺めて居た。

深い空を、眼を離さずに永く眺めて居ると、何故だか思想と心靈とが孤獨の意識の中で溶合つて来る。自分をもうどうにもして見ようのない様な淋しい孤獨な感じになる。そして是れまで親近な、血を分けたものだとか考へて居たものも、全く縁の遠い、價値のない者の様に考へら

れる。何千年となく、天上から下界を眺めて居る星、限りなく不可解な空、短い人生に對して冷淡な夕靄、それ等は直接向ひ合つてその意義を捉らへようと苦心する時、自分の沈黙で精神を壓しつける。墓場に於て我々を待つて居る孤獨が思ひやられて来る。そして人生の本質が、絶對的な怖ろしいものになつて現はれて来る……

エゴールシカは祖母のことを想ひ出した。今頃は墓場の櫻の樹の下で眠つて居ることだらう。棺に納まつた祖母の兩眼の上には五錢銅貨が載つて居るだらう。棺の蓋をして墳墓中に降した當時の光景、蓋にぶつかつた土塊の寂しい音などが次々浮んで来た。窮屈な暗い棺の中の祖母、皆に棄てられて頼りない祖母が眼の前にチラついて来た。彼はまた俄かに醒めた祖母が、何處に居るとも知らずに、蓋を叩いて助けを呼んでゐるところや、仕舞には恐怖に堪へることが出来なくなつてまた死んで行くところを想像に描いた。それからまた母親やフリストフォール神父やドラニツカヤ伯爵夫人やソロモンをも皆死んだ者として想像して見た。けれど彼自身が遠く離れた暗い墓穴の中に棄てられて、頼りなく死んで居るとはどうしても想像出来なかつた。彼は自分にだけ死の可能を許さなかつた。彼だけは決して死なぬものであると感じて居る……

もう死んでもいゝ年配のパンテレイは下の方を歩きながら、自分の思想を點呼して居た。

『何アに……善え人達だ……』とパンテレイは呟いた。『子供を勉強させに、わざわざ連れて行つた。だけど子供はあれから如何なつたか……スラウヤノセルブスクにや高等の教育を授ける様な學校はなし……それは嘘ぢやねえ……あゝ善え子供だつた、どうして……成人した後には親父の手助けになるべえ……エゴールイ、お前はまだ小せえが、直きに大きくなつて、親たちを養つてやるだべ……左様に神様がお定めになつただ……汝の父と母とを敬へつてね……俺も子供を有つて居たが、火事に遇つて女房も子供も焼け死んぢやつただよ……嘘ぢやねえ、洗禮祭の前の晩、小舎から火が出ただ……折悪しく俺は自宅に居なかつた、丁度アリヨールへ出かけた留守だつただよ。アリヨールへ行つただ……マリヤは往來に飛び出したが、子供が小舎の中で睡つて居るのを思ひ出して、燃えて居る中へ引き返したまんま子供と一緒に焼け死んぢやつた……然うだ……翌日になつて骨だけを發見けただよ。』

夜半頃エゴールシカは馭者等と小さな焚火を圍んで坐つて居た。ブリヤンの燃えて居る間にキリユーハとワシヤとは附近の谷間へ水波みに行つた。二人の影は暗闇の裡に見えなくなつた。けれどバケツをガチャ／＼させながら話し合つて居るのが聞えて居た。谷間は餘程近かつたと見える。焚火の影は地上に閃々した大きな斑點になつて横はつて居た。月が照つて居た。

だが、紅色の斑點から先きは眞暗だつた。焚火の光りが眞直に馭者等の眼を射つてゐたから、彼等はただ大きな街道の一部分だけしか見ることが出来なかつた。暗闇の裡に辛うじて見得る様な、形の定まらぬ山の様に梱包を積んだ荷馬車や、牽馬の影が透かして見えた。焚火から二十歩ばかりの路傍に、傾いた木の墓標が一本立つて居た。エゴールシカは、未だ焚火の焚きつけられなかつた明るい時分に、遠くの方にも、それにそつくりな、倒れかゝつた、古い十字架が、街道の反対側に立つて居るのを認めた。

水を汲んで歸つて來たキリユーハとワシヤとは鍋一パイに水を注いで、それを焚火の上に据ゑた。ステブカはギザ／＼の匙を両手に握つて、煙に包まれた鍋の傍に席を占めた。そして何か考へ込みながら、水を見つめて泡の立つのを待つて居た。パンテレイとエメリヤンとは並んで坐つた。これも黙つたまゝ深く考へ込んで居た。ドゥイーフは腹這ひになつて、兩拳で頭を支へたまゝ火の方を眺めて居た。ステブカの影が彼の横はつて居る身體の上を躍つて居た。それが爲め彼の美しい顔が陰影で覆はれたりまた急に燃え立つたりした……キリユーハとワシヤとは、焚火から稍々離れた所を逍遙きながら、焚き付けにするブリヤンとベレスト(樹皮)とを掻き集めて居た。エゴールシカは両手をポケットに挿し入れたまゝパンテレイの傍に立つ

て火が草を食べる様子を切りに眺めて居た。

一同休息みながら、何か考へ込んで時々十字架の方を顧みた。十字架の上にも紅い斑點がチラチラ跳つて居た。孤獨な墓の中には何にもか寂びしい、冥想的な、そして非常に詩的なものがあつた。墓は沈黙しかへつて居る。そして其の沈黙の裡に、十字架の下に眠つて居る見知らぬ人の靈魂が存在して居る様に感じられた。靈は曠野の中を喜ぶだらうか、此の月の晩など無聊を感じないだらうか、墓の周囲の曠野は寂びしく喪心して、何か深く考へ込んで居る様だ。草は一層悲哀を帯びて居る。キリギリスも何となく謹慎して鳴いて居る様だ……其の側を通りおがる旅人は皆此の孤獨な靈に供養して、墓が遠く後ろの方に消えて、霧に蔽はれるまではその方を振りかへるであら……

『爺さん、何んだつて、こんな十字架が立つて居るんだ。』とエゴールシカは尋ねた。

パンテレイは十字架の方を一寸視て、直きにまたドゥイモーフの方に眼を移して、

『ミコーラ、こりやよくある、草刈が商人たちを殺した場所ぢやねえか。』と問ふた。

ドゥイモーフは厭々ながら、肘を突いて起き上がり、街道の方視て、

『それが然うだ……』と答へた。

一同黙つてしまつた。キリユーハは乾いた草をビチビチ折つて、それを圓めて鍋の下へ挿し込んだ。火は明るく燃え上つた。黒煙に咽んだステブカは苦しがつて居た。そして暗に包まれた街道の荷馬車のあたりを十字架の影がテラついて居た。

『然うだ、殺しただ……』とドゥイモーフは五月蠅さうに言つた。『親子連れの商人が聖像賣りに出かけただ。そして此所から遠くないイグナート・フォミンの宿で泊つたよ。老爺の方が餘計に飲過ぎて、所持金の自慢をし初めたのさ。商人てえ奴は皆どれもこれも自慢したがるものでな、よくねえだ……他人の前で無暗と威張りたがるだ。丁度其の時草刈の仲間が同じ宿屋に泊り合せただ。商人の自慢話を聞かされたので、たうとう氣が動いただよ。』

『お、神様！……マリア様！』とパンテレイは嘆息した。

『習る日、まだ夜が明けるか明けない中に。』とドゥイモーフは續けた。『商人親子は宿屋を出たよ。草刈りも一緒に出發したよ。一旦那！御供いたしやせう、道伴れがあると賑かだ安心でござえやすからなア！此の邊は一體に物騒でござえして……』と話しかけて道伴れになつた。商人は聖像を毀すといけねえと云ふんで、ブラブラ歩いて居たよ。草刈仲間にとつちや野、勿怪の幸だつたでさ……』

野、勿怪の幸だつたでさ……』

と言ひかけて、ドゥイモーフは跪座づいて起ち上りさま一伸びををした。

『然うだ。』と欠びしながらまた續けた。『途中まではよかつたが、商人が丁度此の邊へさしかゝつた頃、俄かに刈手が鎌を振つてかゝつて來た。元氣のいゝ息子の方は早速相手の鎌を一つ奪ひとつてあべこべにくつてかゝつたよ……だれんど多勢に無勢、商人父子は遂々殺されつちまつた。何にしろ刈手が皆んなで八人も居ただから仕て見ようがねえや。父子は身體中に生きた部分の無かつたほどズダ斬りにされた。息の全く絶えたところで、兩人を街道から引摺り下して父子を道の兩側に別々に埋めつちまつた。それでこの十字架の外にもう一つ、街道の反對側にも十字架が立つて居るだ……腐れつちまつたかどうか知らねえが……ここからは見えねえだ。』

『腐れねえでまだ其の儘残つて居らア。』とキリユーハが言つた。

『あとで搜して見たら、金は少なかつたつてえこんだ。』

『少ねえつて云つて所で百留位はあつただべ。』とパンテレイは断言した。

『其刈手の中の三人は間もなく死んだよ。商人にしたゝか鎌で斬られたせいだ……血が止まらなかつた。中には片腕斬られて、四露里ばかり手無しのまま夢中で駈つた者も居たといふ

だ。それがクリコフ附近の丘の上で、村の者に發見られたつてえこんだ。蹲んで、頭を膝の上に乗れて、何か考へ込んで居る様な恰好をしてね。だけどよく見たら、もう靈魂が脱けつちまつて、死んで居たといふだ……』

『血痕に依つてそれが解つたよ……』とパンテレイが言つた。

一同十字架の方を顧みて再び沈黙した。何處からか鳥鳴の悲しい鳴き聲が響いて來た。「スプリュー、スプリュー、スプリュー」と多分谷間の奥で啼いて居るのだらう。

『世の中には、悪人共が随分居るだからな。』と、エメリヤが言つた。

『居るとも、居るとも!』と、パンテレイは同意しながら、さも苦痛に堪へないといつた風を見せて火の方へ寄つた。『居るとも』と聞えるか聞えない位の聲で續けた。『俺ア一生のうち、さういふ人間には随分出遭つただよ……悪黨にさ……聖人や義人にも澤山遭つただが、悪人の方は數へきれねえ程だ……救ひ給へ、恵み給へ、天の女王!……三十年程以前の話だが、たつた一度、いや或はもつと多かつたかも知れねえが、俺はモルシャンスクから商人を一人乗せて出た。商人は溫和しい、有名な金持で……商人だつたが、どうして善え人間だつた……そこで俺達は宿屋で泊らうとした。ロシアちや此の邊の宿屋とは違つてなア、どつちかつた

らバラツク式に出来て居るだ。經濟向のえゝ納屋とも言はれてゐるだ。その代り少々宿賃が高えだよ。まあ何事もなく其所へ泊り込んだだ。商人は部屋の中へ納つたが、俺は馬と一緒に残つて居た。是れがおきまりだでな。其の中に睡たくなつただから御祈禱を済まして、邸内を見廻りに出た。眞暗な晩で一寸先も見えなかつたよ。そこを少し通り抜けて荷馬車の所まで来ると、確かに火の燃えて居るのが見えた。どうしたんだべえ。宿の者たちも早く寢てしまつた筈だに、こちだつて俺と商人の二人だけで外にや誰も泊り客がねえのに……どうして火があるんだか。俺ア奇怪でならなかつたよ……段々傍へ寄つて見ただ……火の方へ……ところが驚いたの何んのつて、地面に格子付きの窓が一つあるぢやねえか……家の中のさ……俺ア恐るおそる匍つて、中の様子を窺つた。見ると大變なこんだ。俺の全身がぞくぞく慄へ出しただよ……」

キリューハは音を立てない様に、氣を配つて、焚火の中へブリヤンを一束挿し込んだ。ブリヤンのピチピチ跳ねたり、シューシュー鳴つたりするのが止むのを待つて爺さんは續けた。

「覗いて見ると、大きな、暗い怪しい地下室なんだ……樽の上には燈火がついて居る。地下室の眞中には赤い襦袢を着た十人ばかりの者が立つて、袖をまくつて長い刃物を研いで居るだ。

さアしまつた、俺たちは盜賊の群の手中に落ちただ……どうしようかと思つて先づ商人の處へ駆けつけたさ。靜かに商人を起して、「旦那、吃驚なさつちやいけねぜ。困つたことになつちやひましただ……俺等は盜賊の巢に飛び込んぢまひやしただよ」と、言つてやつたら、商人は顔色を變へてな、「どうしようパンテレイ！俺の所にはお金が澤山ある……俺の生命は神様に御委せしてあるから、死ぬことなんざア心配しねえだが、お金を奪はれちや大變だ、それが何よりも辛えんだ」と云ふから、では何うしやせう、門が締つて居るだで逃げ出す譯にや行かず……扉位なら越せるだが納屋式だから出口がねえ……「さうびつくりなさつちやいけねえ。精出して神様に禱りなせえ。神様は孤獨の者を苦しめなさることありますめえから。此所に居なせえ、姿を見せちやいけねえ、其中に一つ巧く考へますだから……」かう言つて、俺ア神様に御祈禱しただ。神様に智慧を貸して貰つたよ……で自分の三頭馬車に攀登つて、靜かに……誰にも聞えねえ様に、靜かに屋根裏の藁をむしり始めただ。孔が開いたから外へ匍び出して、外面へ出ちやつた……それから俺ア屋根から跳び降りて、息のつゞく限り街道をヒタ走りに走つた。駈つたとも、駈つたとも、息の切れるまで駈け續けたよ……殆んど五露里位一息で走り脱けた。もつと餘計駈けちやつたかも知れねえ、有難えことに直き村が一つ見つかつ

たで、一番とつつけの農家に駆け込んで窓を叩いて、「正教の方々！ さア、さア、さア、基督教徒の靈を救つて下さつしやい……」と、どなつて皆なを起こした……すると百姓たちは支度して俺と一緒に出かけた……繩を有つたり、棍棒を提げたり、草搔きを擔いだりして、行つて宿屋の門を叩き毀して、いきなり地下室に押し寄せた……ところが盜賊共は刃物を磨き終つて恰度商人を屠らうとして居るところだつたよ。で、其場で奴等を縛り上げてお役人の所へ連れて行つたさ。商人は喜んで百姓達に三百留やつたよ。俺にもくれた。そして俺の名を記念に書きとつたよ。あとで地下室から澤山の人骨を見出したつてえこんだ。骨だよ……彼奴等は人々を掠奪して居ただ。そして痕跡の残らねえ様に皆埋つちまつただ……彼奴等は後で、皆モルシヤンスクで死刑に處せられたつてえこんだ。」と、パンテレイは語り終つて一同を視廻はした。聴き手は皆黙つたまゝ彼を視守つて居た。湯はもう沸きたつて、ステブカは泡を掬つて居た。

「脂は用意してあるだか。」とキリューハは小聲で彼に問うた。

「少し待ちねえ……いま直きだから。」

ステブカはパンテレイから眼を離さずに、自分の去つたあとで彼が話し初めやすまいかと心

配しながら荷馬車の方へ走つて行つた。が、直きに大きな木匙を有つて戻つて來た。そして其の匙の中で豚の脂を搾り潰し始めた。

「此の外にまた商人と一緒に旅をしたことがあつたよ……」と、パンテレイは依然低い聲で眼をばたきもせず續けた。「未だ覚えて居るが、ビョートル・グリゴリーイチといふ男だつた、人の善え人間さ……商人だつたけど……また同じ様に宿屋に泊り合せた……其人は部屋で、俺は既でう……主人夫婦は氣だてのえゝ愛嬌のある人間の様だし、召使共も何んでもねえやうだつたが、さて何となく氣になつて、其の晩はおちおち寝つかれなかつた！ 何だか不安でならなかつたが、兎に角休息んで居ただ。門は開つばなしだし、人も澤山居ただよ。だけど何んだか解もわからずに怖かつた。皆な早く寝てしまつて、夜も愈々更けたで、直きにまた起きなきやならねえだ。だけど俺ばかりは馬車の中で寝ただが、眼がどうして塞がらねえだ。まるで鼻の様にさ。するとそのうちに、トウブ！ トウブ！ トウブ！ といふ音がするぢやねえか。誰か馬車の方へ忍び寄つて來ただ。で、頭をそつと突き出して見ると、下着一枚着た百姓女が立つて居るぢやねえか、跣足のまゝでさ……「何用があつて來た」と訊いたけど、彼女の總身が慄へて居るだけで、まつたく顔がねえんだ……「起きな、さア起きな！ 大變だから、

宿の主人が悪る企をして居るだよ……お前さんの主人を殺さうとして居るだ。今私は、旦那と女將の内密ばなしを聴いて来ただよ……」と言ふんだ。寝つかれぬえの無理がねえ、蟲が知らせただ！そこで「お前さんは一體誰だ」と尋ねると、「私はこの宿の料理番だ……」といふから、よし来たとはかりに、いきなり馬車から飛び出して商人の所へかけつけて、呼び起しただ。「さあ、さあ、ピョートル・グリゴリーイチ、大變なことになるした……旦那、眠るなア後だ、今のうちさつさと仕度して、この場を逃れなけりやなんねえです……」とせかしただ。やがて商人が起きて着物を着かけると、扉がグーと開いただ。で、その方を振向いて見ると、大變だ！主人夫婦が三人の男を連れて押し込んで来ただ……家僕たちを焚きつけたんだね……商人は金持だ、どうだ山分にしやうぢやえかつてね……五人とも各自に長い刃物を提げて居たよ……いやに刃物を光らせての……そこで主人は扉の錠を下して言ふには、「旅の者！神様に禱らつしやい……叫喚いたりすりや、手を下す前に祈らせねえから左様思へ……」つてね。その場合聲なんか出るもんぢやねえ。咽が塞がつて叫ぶどころぢやねえ……商人は愈々泣き出したよ。そして憐れつばい聲で、「正教の方々！皆さんは俺を殺さうと定めたのか、その金に眼がくれたのか。斯ういふ運命に陥つた俺は、最初の者でも最後の者でもないんだらう。定

めし是れまでも、澤山の同胞が商人が此處で殺されたことだらう。けれども正教の兄弟達！何んだつて俺の取者までも殺さうとするんだ。此の金の爲めに、取者まで苦しむといふ譯はない！」とさう云つたから、主人は「若し彼奴を生かして置いたら、俺たち罪業の證人になるからなア。一人殺すも、二人殺すも、同じこつだ。乗りかけた船にや乗らねえ譯にや行かねえ……さア神様に禱れつたら……さア、これつきりだ、もう外に言うこたねえ！」と言ふので、俺も商人と並んで跪坐づいて泣きだしただ。神様に御祈禱しようと思つてね。商人は自分の子供達のことを想ひだしたよ。俺ア其時未だ若かつたで死にたかアなかつただ……二人は聖像の前に平伏して祈禱つただ。今思ひ出しても涙が出る位切なかつたよ……すると女將が此方を見て、「お前たちは善い人間だ、彼世へ行つたら私たちを忘れてくんろ、私たちの首を神様に祈つてくれちや困る。私たちだつて、餘儀なく人殺しなけりやならねえだ……」と云ふんだ。そこで二人は愈々観念して、祈禱つたり、泣いたりしたよ。すると神様に二人の願が届いたらしい。神様も不憫に思召されただ……主人が商人の頭髻を捉らへて今にも其の首を斬り落さうとしてた剋那、突然藪か戸外から窓を叩くぢやねえか！居合せた者は皆驚いて、ひれ伏しただよ。主人も両手をだらりと垂れて了つたよ……誰だかまだ窓を叩いて居る。そして「ピョー

トル・グリゴリーイチ、お前は此所に居たのか！ 仕度しな、そして一緒に出かけよう！と
言ふだ。で、こりやテツキリ商人を連れに來たものと、流石の悪黨共も吃驚して、其儘一散に
逃げ出したよ……俺等も早速庭に出て、馬車の仕度をしたさ。もう周圍にや誰も居なかつた
よ……』

『だが、一體誰が窓を叩いただ？』とドワイモーフが尋ねた。

『窓か、そりや、聖者か天使か。誰も居ねえだからなア……宿を脱け出て時、街道にやもう誰
の影も見えなかつたよ……神業といふもんだ！』

パンテレイはもつと變つた話をして聴かせた。けれどどの話の中にも、必ず「長い刃物」が
出て來た。そして悉く虚構の様に感じられてならなかつた。他人のした話を聞いてきたものか、
それとも、昔し自分で想像したものが年を取るに随つて、記憶が衰へたから、経験と想像とが
ゴツチャになつて相互の區別が出來なくなつたものか、何しろ滅多に有りさうもない事柄ばか
りだつた。だが、斯うやつて旅をして語り合ふ様な時分に、自分の想像ばかり話して、少しも
自分の經驗談をしないのが、如何にも不思議でならなかつた。エゴールシカは今、全部が實際
にあつたことだと思ひ込んで、話の言葉一つ一つを眞實に信じて居た。然し、後で生涯を斯う

やつて旅の中に送つて、殆んど全ロシアをも乗り廻はして、澤山に見たり聞いたりしたこと
ある人が、おまけに妻子までも焼け死にさしてしまつた人が、斯うやつて焚火の傍に坐つて、
何時も沈黙つて居るか虚構りごとを喋るまで、その豊富な生涯を見棄て、しまつたことが、
如何にもエゴールシカに取つて不思議でならなかつた。一同黙つてカーシヤを食べて居た。そ
して各自に今聞かされた話を考へて居た。人生は恐ろしく奇蹟的なものだから、どんな恐ろし
い物語をしようと、どんなにそれを、盜賊の巢窟や、長い刃物や、奇蹟などで飾り立てようと、
何時もそれが聴き手の頭の中では事實の様に響く。ただ餘計に學問した人間ばかりが、疑ひ深
く、首を傾げたり、沈黙したりする。路傍の十字架、梱包の影像、廣漠たる曠野、焚火の周圍
に集つた人たちの運命……これ等が既に甚だ奇蹟的であり、恐ろしくもある。作り事や昔譚の
空想が、蒼白くなつて、眞の人生と溶け合つてゐた。

一同鍋を圍んでつゝいて居たが、パンテレイだけは一人側方に離れて、椀の中のカーシヤを
食つて居た。彼の匙も他人のものとは異つて「いと杉」製だつた。おまけに小さな十字架まで
附いて居る。エゴールシカは彼の方を見たとき燈明用の油壺を想ひ出して、ステブカに向つて
靜かに訊いた。

「何故この爺さんだけが獨り離れて坐つて居るんだ？」

「そりや、爺さんは舊信仰派の人間だからさ。」と、ステブカとワーシヤとが一緒に低聲で答へた。其時二人は、何か人の弱點か或は祕密なことでも話したかのやうに思つた。

一同沈黙して只深く何事か考へ込んで居た。恐ろしい物語の後では普通の話がしたくなかつたと見えた。急にワーシヤは、黙つたまゝ身體を眞直にした。そしてその曇つた眸を一點に集めて耳を聳てた。

「如何した？」とドゥイモーフが彼に問ふた。

「誰か歩いて居る。」と、ワーシヤが答へた。

「何處にさア？」

「ホラ、あれだ、あれだ！ 茫つと白くなつて見える……」

ワーシヤの見る方には、暗闇の外何も見えなかつた。一同耳を聳てたが、足音さへ聞えなかつた。

「街道を歩いて居るだか？」とドゥイモーフが尋ねた。

「いや、野原の中だ……此方へやつて来る。」

一分間ばかり沈まり返つてゐた。

「ちや、其處に埋られた商人が、曠野の中をうろついて居るのかも知れねえ。」とドゥイモーフが言つた。

一同十字架の方へ向つて徐かに歩み寄つたが、俄かに笑ひ出した。あまりの臆病さに、皆自分ながらをかしくなつたのだ。

「何んだつて商人がそこいらに迷つて居るものか。」と、パンテレイが言つた。「夜中うろろろして居るのは只大地に受入れられなかつた亡靈だけに限るだよ。だけど商人父子は……父子は殉教者の榮冠を戴くことが出来ただからな……」

其のうちに足音が聞え出した。誰か忙し相に歩いて来る。

「何か持つてるだ」と、ワーシヤが言つた。

歩いて来る人に觸る草のサラサラ鳴る音やブリヤンのピチピチ折れる音などが聞え始めた。けれど焚火の火影には誰の姿も現はれなかつた。愈々足音が近くなつた。誰か咳をする。チラチラして居た光が開いたと思ふと急に一同の眼前に人影が一つ現はれた。あんなにチラチラしたのは火影だつたらうか、それとも皆が第一に其の人の顔を見ようとしたせいか。けれど不

思議なことには皆が皆、その人を始めて見た時に、一番先きに眼に入つたものは、顔でもなけりや着物でもなく、たゞその微笑であつた。その微笑がまた非常に善良な、廣い、柔かい印象を與へた。丁度眼を醒ました赤ん坊の微笑の様だつた。其の微笑に對しては、如何しても亦微笑で返さない譯には行かないほど、一種の傳染的的微笑だつた。よく／＼見ると、此の見知らぬ人は三十前後の、醜い、何等の特徴をも有たない人間だつた。丈が高く、鼻が長く、手足もまた長い小ロシア人だつた。總體に凡てが長かつた。只首ばかりが、その人を猫背に見せたほど短かつた。縫ひ襟のついた純白の下着を着て白いズボンに新しい長靴を穿いて居た。そして腹者などに比較しては遙か扮飾者だつた。兩手に何だか大きな、見た所白つぽい、變なものを握つて、片方の肩の背ろから長い銃身が顔を出して居た。

暗い所から明るい圈内に入つて、根の生えた様に立ち停つた。半分間ばかり一同を見つめて居た。「どんなに私が微笑するかまあよく御覽なさい」とでも言ひ相な恰好して、それから焚火の方へ寄つて、益々明るい微笑を湛へながら言つた。

「皆さん、大變な御馳走ですね！」

「どうか、こつちへ！」とバンテレイが一同に代つて答へた。

見知らぬ男は焚火の傍に、手に持つて居たものを置いて——それは死んだ鳥だつた——も一度挨拶した。

一同野鴨の方へ寄つてそれを檢視した。

「大かい鳥だなア！ 如何して捕へました？」と、ドゥイモーフが尋ねた。

「葡萄弾でさ……霧弾なんかちや獲れねえ。てんで寄りつけねえからなア……買はねえかえ！」

皆さんだつたら二十哥で賣りますよ！」

「それ買つて何にするだ！ 焼いたら甘えが煮ちや硬え筈だ！ 噛めやしめえ……！」

「あーあ！ 失望した！ 旦那所へ持つて行きや五十哥で買つてくれるよ、だが速いからな

あ——十五露里からあるだ！」

見知らぬ男は坐つて、銃を肩から脱つて、それを自分の側に置いた。如何にも睡む相で、疲れて居るらしかつた。相變らず微笑して居る。火の爲めに目を醒めたが、何か大きな楽しみを考へ込んで居る様だつた。彼に匙を渡したので早速彼は食べ始めた。

「一體、お前さんは誰だ？」とドゥイモーフが尋ねた。

見知らぬ男はその言葉が聴きとれなかつたと見えて、返事もしなげりや振り向きもしない。

カーシヤの味も解らない様だつた。只機械的に、倦怠げに、盛り上つた匙や、空の匙を、口の所へ持つて行きながら、只囁んでばかり居た。酔拂つては居ないが何となく氣まぐれ地味で居た。

「お前さんになア、お前さんは一體誰だつて訊いて居るだよ。」とドゥイモーフは繰り返した。「俺か？」と、その男は驚いて、「ローヴノエ生れのコンスタンテン・ズウォーヌイクつてえ者だ。此處から四露里ばかりの所に住んで居るだよ。」

斯う言つて先づ第一に、他の百姓なんかとは性が違ふ、それよりやすつと偉いんだと云ひたさうに、コンスタンテンは急いで附け足した。

「俺ア、蜂の巢も有つて居るし、豚も飼つて居るよ。」

「親爺と一緒に、それとも獨り立ちか。」

「うんにや、今ちや獨り立ちだ。親爺とは別れただ。此の月のビョートル祭のあとで嫁を買つて、今ちや妻帯者だ……嫁買つてから今日が十八日目だ。」

「結構なこつた！」とバンテレイが言つた。「女房はえゝもんだ……神様の祝福でえもんだ……」

「若けえ女房が家で睡つて居るつてえのに、彼奴ア疇野をうろつき廻つて居る。」とキリユーハは笑ひ出した。「變り者だなア！」

コンスタンテンは丁度弱點を衝かれた様に驚いて笑ひ始めたが、急に憤怒り出して、「ところがなア、彼女や今家にや居ねえだ！」と言つたが、あわてて口から匙を吐き出しながら、嬉し相に、驚いた様に見廻はして言つた。「居ねえだよ！ 二日の豫定で母親の許へ歸つただ！ 眞實に、彼女や歸つただ。それで俺アまるで妻帯者ぢやねえ様だ……」

コンスタンテンは片手を振つて頭を振つた。考へ續けようとしたが、顔に上つて來た喜悅が急にその邪魔をした。彼は坐つてゐるのが窮屈らしく、姿勢を變へて、笑ひながら再び片手を振つた。他人に自分の喜びを見せるのが、如何にも氣まぐれが惡る相だつた。けれど同時にまた耐へきれぬ程喜びを分ちたかつたのだ。

「デミドウオの母親の許へ出かけて行つたよ！」と振くやつて、別な所へ銃を置きかへながら、「明日は歸るだらう……晝までにや歸ると云つてたから！」

「ちや、お前さん寂しからうね。」とドゥイモーフが訊いた。

「えゝ、寂しいの何んのつて……一年も經つたのならまだしも、嫁に來てから一週間も經たね

え中に行かれちゃ……あー困つた女だよ、だが、其處にまたえゝところがある。溫和しくつて、愛嬌もあり、いゝ聲で歌も詠ふが、そのまた怒りつばいことつたら！ 彼女の傍に居ようものなら頭がくらくらしてしまふ。それで居て、さあ彼女が居ねえとなると、全く氣の抜けた様になつてしまふ。で、馬鹿見た様に、斯うやつて曠野の中を歩き廻つて居るだ。晝から殆んど歩き通しだよ。いくら番人が呼びかけたつて、振り向きもしねえだ……」

コンスタンチンは眼を擦つて火の方を視ながらまた笑ひ始めた。

『して見ると、お前さんも相手を受してゐるだ……』とパンテレイが言つた。

『彼女やいゝ女だ、溫和しくつて。』とコンスタンチンは耳にもかけず繰り返した。『理想的な主婦さんだ。削巧で、物の解りが早くつて、何にしろ、あんなのは縣内搜したつても平民の中にや二人と居やしねえだが、彼女は去つちやつた……アア今頃は彼女も寂しがつて居るだらう。解つてゐらア！ あの頭飾が眼に映るだよ！ 彼女や明日の晝にや歸ると云つた……眞實に、えれえことになつちやつた。』と俄かに高い聲を張り上げて、而も姿勢まで變へて叫んだ。『彼女も今ぢや愛してくれる。寂びしがつても居る。だけど嫁に来る前にや、ほんとに厭がつてゐただ！』

『まあ、いゝから食べるよ！』とキリユーハが言ふ。

『俺の所へ嫁に来たがらねえでな』と、コンスタンチンは耳をかかさず續けた。『殆んど三年間も彼女と揉め合つただよ！ カラチークの定期市で彼女を見染めてから、スツカリ惚れ込んで、もう死んだつても構はねえと了簡した……俺あロヴノエの生れだし、彼女やデミドワの者だから、双方二十五露里も隔つて居る。どうにもして見ようがなかつた。そこで媒酌人を頼んで行つて貰つたが、彼女や厭だと云ふだ！ でも、俺アそんなことがあつても貰ひたかつたから、耳輪に、蜜餅に、蜂蜜半ブート持たせてやつただよ。だが、それでもまだ厭だといふだ！ もうどうにもして見ようがねえだ。して見りや彼女と不釣合なのか？ 彼女や若くて、美しくつて、怒りつばい、だけど俺ア、年を取つて居る、直きに三十になるだ。おまけに素敵な美男子ときて居らア。密生した鬚髯はまるで釘の様だし、きれいな顔は癩だらけなんだからなア。到底彼女と比べものにならねえだ！ 此方が氣樂に暮して居ると言ひてえが、向ふだつてもワフラメンク家だ、裕福な暮しを立て、居らア。牛が三對、下男二人も抱へて居るだ。俺アすつかり上氣せ上つて、氣まで狂ひ出したよ。夜は睡られねえし、三度の食事は食べられねえし、頭の中はゴチャゴチャする、氣は逆上する、そりや大變だつたよ……彼女に會ひて

えと思つても、遠いデミドウォに居るだからなア……それから如何したと思ふ？ 嘘ぢやねえ、一週間に三度は、彼女に會ひてえばつかりにテクテク通ひづめたさ。仕事なんか丸でそつちのけで！ 同じ傭はれるんだつたら一層のこと彼女に近いデミドウォへ行つて傭はれてえと考へ出したゞ。で、氣はだんく狂ふし、母親は呪ひ師を呼んで来る、親爺は何でも十回ばかり擲りつけたよ。三年の間といふもの、斯うして惱み通しさ。そこで愈々決心して、此の上三度呪咀はれたら、俺ア都會へ出て馭者にならうと決めただ……よくよく運がねえと諦らめて、愈々復活祭の日に、俺アデミドウォへこれを最後と思つて、遇ひに出かけて行つただ……」

コンスタンチンは頭を後方へ投げて、細かい愉快な笑ひを漏らしたがまた、如何にも狡猾く、誰かを冷笑した恰好だつた。

「すると彼女が他の若者どもと小川の畔りに立つて居るぢやねえか。」とコンスタンチンは續けた。「そこで俺も憤怒としただよ……いきなり彼女を側の方へ呼んで、かれこれ一時間ばかりも色んな説教をして聴かせると……急に變つて、俺を愛するやうになつたゞ！ 三年間丸つきり應のなかつたものが今の説教で急に翻つちまつただ！……」

「如何んな話をしただ？」とドゥイモーフが訊いた。

「其の時の言ひ草か、もう覚えてなんか居やしねえ……どうして思ひ出せるもんか。其時や丸で漏斗から水の漏る様に息をもがず、夕、夕、夕、夕、夕、夕……だ。だけど、今其時の一言半句だつても言へやしねえ……そこで彼女も愈々嫁に來ただ……そして今此の鵲鳥は母親の許へ歸つて居るだ、俺だけが獨りで曠野をさ迷つて居るだ。家に坐つてなんか居られるもんぢやねえ、俺にやそんな力なんかありやしねえ。」

コンスタンチンは下に敷いて居た兩足を不興氣に投げ出して、地上で大きな伸びをした。それから兩拳で頭を支へながら起き上つて再び坐り直した。一同は今漸く了解つた。こりや何んでもない、惚れ込んだ艶福者だ、戀煩ひの幸福者だと。彼の微笑、その兩眼、其の一舉一動が、堪へ切れぬ幸福を現はして居た。彼は落ちつく場所を見つけ出せなかつたのだ。楽しい想ひの過剰に依つて困窮し切つて終はぬ様に、どんな姿勢をとつたらいいものか、又何を爲たらいいものか願ひ解らなかつたのだ。今他人の前に自分の心情を披瀝して、すつかり安心したらしい。火を視つめたまゝ、落ちついて何か考へ初めた。

艶福な男を目のあたり見て、一同は寂寥を感じたらしい。彼等も矢張り幸福が欲しいのだ。一同深く考へ込み始めたのも無理がない。ドゥイモーフは立ち上つて靜かに焚火の側を通つて

行つた。その歩き振りや、肩の揺り様に依つて、彼が如何にも疲れきつて、物思ひに沈んで居る様子が見えた。彼は暫らく立ち停つてコンスタンチンの方を視て居たが、そのまゝ坐つてしまつた。

その中に焚火は消えた。光は最早チラ／＼しなかつた。紅色の斑点も狭まつてくすんで来た……火が消えるにつれて月明りが明瞭として来た。街道も其の全幅が見える様になつた。梱包も見える、反芻して居る馬たちの轅木も眼に入る向ふ側には別な十字架がぼんやりと描き出されて居た。

ドゥイモーフは片頬を片手で撫で、靜かに何だか憐れつばい歌を謳ひ始めた。コンスタンチンは睡む相な微笑を漏らしながら、つい誘はれて細い聲を引つ張つて居た。二人はやがて三十秒位も謳つたかと思ふと、ハタと止んだ……エメリヤンは吃驚して兩肘を動かした。そして指をもぐもぐさせながら、

『兄弟たち！』と、さも懇願する調子で言つた。『どうだえ、一緒に何か讚美歌でも一つ歌はうちやねえか！』

彼の兩眼からは涙が迸り出た。

『兄弟たち！』と彼は片手を心臓の上に押し當てながら繰り返した。『何か讚美歌を一つ合唱しよう！』

『俺ア謳へねえ。』とコンスタンチンが言つた。

一同も斷つた。其時エメリヤンは、獨りで何やら歌ひ始めた。兩手を動かして首を振つて居る。口を開けたけれど、咽喉からは微暖れた、音のない息ばかりが揉ぎ離れて居た。彼は兩手と頭と兩眼と痛とでもつて歌つて居た。熱心に、苦し相に、せめて一曲なりと胸の中から絞り出さうと思つて、胸を盛んに張れば張るほど其の聲が立たなくなつた。

エゴールシカも他の者と同じ様に寂しさに囚はれた。自分の荷馬車の方へ行つて、梱包に攀ち登つたまゝ横つて、天を眺めながら幸福なコンスタンチンと彼の妻とを想像して見た。何故人は嫁を貰つたりするんだらう？ 此の世の中で女が何んの役に立つんだらうと、エゴールシカは自分に曖昧な質問を試みた。そして若しも男の傍に愛嬌のある快活な美しい女が何時も離れずに暮して居たら、どんなにいいだらうなどと考へた。やがてまた何とはなしにドラニツカヤ伯爵夫人のことを想ひ浮べた。あの様な女と一緒に暮したら楽しみが多からうとも考へた。

野 氣まりさへ悪くなかつたら、或は喜んで彼女と結婚したかもしれない。彼女の眉、腫、幌馬車、

飾付きの時計なども想ひ浮んで来た。静かな、暖かな晩が、彼の上に降りて来た。そして彼に何か内密で囁いた。彼はそれを美しい女が彼の上に屈んで微笑しながら彼の方を眺めて接吻しようとして居るのだと考へた……

焚火の跡には、益々小さくなつて行く二つの小さな紅い眼が残つて居た。馭者たちもコンスタンチンも其の附近に坐つて居た。黒い不動の影が以前よりもスツと増えた様に思はれた。だが、両方の墓標は一樣に速くの方に離れて見えた。何處か街道の上に、赤い小さな火影が見えて居た——同じ様に誰か矢張りカーシヤを焚いて居るのだらう。

「我等が母國ロシアこそ廣い世界の頭なり。」

と、俄かに頓狂な聲でキリユーハが歌ひ始めた。が、息が塞まつたと見えて直きに止めた。曠野の反響が彼の聲を捉へて速くへ運び去つた。暫らく曠野中をその愚かしい歌が重い車に乗つて轉じて居る様に思はれた。

『もう出かける時だ。』とパンテレイが言つた。『兄弟たち、いゝ加減にして、さア起きなア！』馬を車に繋いで居る間、コンスタンチンは馬車の附近を歩いて居た。彼は自分の女房のことを想ひ浮べながら、大恐悦であつた。

『左様なら！ 兄弟たち！』と荷馬車の縦列が動き出した時コンスタンチンが叫んだ。『色色御世話になつて有り難う！ 俺アまた彼の火の方へ行くだ、落着いておられねえだ！』

と、言ひ残して彼は間もなく暗の中に消えた。後には他の火の方へ自分を吹聴に出かけて行つた鬚鬚男の足音ばかり何時までも聞えて居た。

翌日エゴールシカが目醒めた時は、まだ早かつたので、日も出て居なかつた。荷馬車の縦列は停つて居た。白い軍帽を戴いて、鼠色の廉い軍服を着て、コザツクの小馬に跨つた男が、先頭の荷馬車の側でドゥイモーフやキリユーハと何か話し合つて居た。縦列から二露里ばかり前方には、細長い、低い納屋や瓦葺きの農家などが白くなつて見えた。その農家の附近には庭も樹も見當らなかつた。

『爺さん、ありや何んでえ村だ？』とエゴールシカは訊いた。

『ありやアルメニヤ人の部落だ。』とパンテレイが答へた。『アルメニヤ人が住んで居るが、悪い人間でも何んでもねえ……』

鼠色の服を着た男はドゥイモーフやキリユーハと話をし終つたらしく、小馬を後退りさせて部落の方を見た。

「何てこつだ！」とパンテレイも矢張り部落の方を眺めながら、早朝の涼氣に兩肩をすぼめて溜息を吐いた。「あの人居落へ何かの書類を取りに使ひをやつたが、まだ歸つて來ねえだ……ステブカをやればよかつたのに！」

「爺さん、ありや一體誰だ。」とエゴールシカは訊いた。

「ワルラーモフさ。」

さア大變だ、エゴールシカは早速跳ね起きて坐り込んだ。そして白い軍帽の方を頻りに眺めて居る。鼠色の短い服を着て、大きな靴を履いて、醜い馬に跨つて、而も普通の人ならまだ睡つて居る時分にもう起きて百姓等と語り合つて居る人が、皆の搜して居る、何時も「かけ廻つて居る」そしてドラニツカヤ伯爵夫人よりも遙かに澤山の金を持つた、不思議なあのワルラーモフだとはどうしても考へられなかつた。

「何アに、えゝ人間だ……」とパンテレイは部落の方を眺めながら、「何時までも生かして置きてええゝ旦那だ……ワルラーモフ・セミヨン・アレクサンドルイチだ……あゝ云ふ人間が居るから助かるだ。嘘ぢやねえ……鶏のまだ鳴かねえ中にもう起きて奔走はたらいて居らア……外の者にや出來ねえ相談だ。人がまだ睡つて居るか、客と馬鹿話でもして居ると云ふのに、あの人は

一日中曠野を馳せ廻つて居るだ……仕事しねえぢや居られねえだ……いや！ 却々の偉物だて……」

ワルラーモフは農村の方を見つめながら何やら言つて居た。小馬は耐へきれずに足踏みして居た。

「セミヨン・アレクサンドルイチさま！」とパンテレイは帽子を脱ぎながら叫んだ。「ステブカをお遣んなせえ！ おい、エメリヤン、ステブカを遣るやうにさう言ひなよ！」

さうして居る中に部落から騎手が走つて來た。上體を甚しく側方に傾けて、頭の上よりも高く鞭を振り上げながら、丁度曲馬の様に勇敢な騎乗で一同を驚かしてやらうとでも考へたか、飛鳥の様に荷馬車の縦列目がけて馳つて來る。

「屹きつと度ありや乗馬の使者だ」とパンテレイは言つた。「あの人の手許にや斯ういふ騎手が百人も、もつと多くも居るだ！」

先頭の荷馬車の處まで驅けつけた騎手は馬を後退りさせて、帽子を脱り、ワルラーモフに何だか小さな帳面を手渡した。ワルラーモフはその手帳から幾枚か書き付けを抜き出して、それを読み終つた時、恚う叫んだ。

『何處にイワンチエークの書付がある？』

使者は帳面を取り戻して書類を一通り調べた後で兩肩を窄めて、何か喋べつた。多分言ひわけだらう。そしてもう一度農村へ往復させてくれると願つた。小馬はワルラーモフが重いと見えて動き出した。ワルラーモフも馬上で、身體を揺つた。

『行つて来い！』と彼は腹立たしく叫んだが、急に使者を目がけて鞭を振り上げた。

それから馬を返して書類の點檢をやりながら、並足で荷馬車の縦列に沿ふて進んだ。最後の荷馬車の所へさしかゝつた時、エゴールシカはよく一つ彼を見てやらうと大きな眼を見張つて居た。ワルラーモフはもういゝ年寄りだつた。

顔には多くもない灰白色の鬚が生えて居る。ありふれたロシア型で、日に焼けて嚇くなつて居る。露に濡れた其の顔には靜脈が條張つて居た。この顔もイワン・イワヌイチの顔と同じ様にそつけない極めて事務的な表情を表はして居た。それは同じ事務的な熱狂主義である。だが、二人の間には非常な懸隔があつた！ グジミチョーフ伯父の顔には事務的な無愛想な表情の外に、ワルラーモフに遇へないかしら、遅れやしないかしら、いゝ値を取り逃がしはすまいかしらといつた様な心配と恐怖とが何時も二つ並んで現はれて居た。下々の不自由勝ちな人間

に付きものである以上の表情は、ワルラーモフの顔面にも動作にも認めることは出来なかつた。彼は自分で相場を定めた。誰をも捜しやしない。また何人の支配をも受けない。彼の外縁は如何にも普通一遍のものだが、凡てに於て、而もその鞭を握つた様子にさへも、如何にも優れた手腕と、曠野を征服して居るといつた風な威力の自覺とを現はして居た。

エゴールシカの傍を通つても、その方を振り向きもしなかつた。只小馬ばかりが振り返つてエゴールシカを満足させただけだ。小馬は大きな愚かしい眼で彼を視たが、それは極めて冷淡であつた。御辭儀したパンテレイが氣に留つたと見えて、ワルラーモフは書類を見ながら、縫れたものゝ言ひ方で言ふた。

『今日は、爺さん！』

ワルラーモフが使者に向つて云つた言葉や、振り上げた鞭が、荷馬車の縦列の者全體に威壓的な印象を與へたと見えて、皆眞面目な顔付をして居た。使者は強者の怒に遭うて力抜けがしたと見え、帽子も被らず手綱も垂れたまゝ先頭の荷馬車の側に立つて居た。彼に取つて、朝つばらから景氣の悪い此の一日をさも信じないかの様に沈黙し返つて居た。

野 『強情な老爺だ……』と、パンテレイは呟いた。『困つたもんだ、如何にも頑固でなア！』だ

けど、まあいや、えゝ人間だから……虚めたりなんかしやしねえから……何アに……」
 書類を視終つたワルラーモフは手帳をポケットの中へ挿し込んだ。小馬はさも彼の意思を付
 度したらしく、命令を待たずに身を慄はせて大街道を疲驅し去つた。

七

腹者達は、その翌晩もまた合營を張つて、カーシヤを焚いた。今度は前夜と違ひ、最初から
 凡ては何となく曖昧な哀愁を感じて居た。息苦しい晩だつた。盛んに飲んだ。けれど、容易に
 渴を醫すことが出来なかつた。月が出た。ひどく青ざめた陰氣な、病んで居る様な月だ。星も
 矢張り顔を擧めて居る。夕靄は濃くなつて来るばかり、遠くの空は愈々混濁して來た。自然は
 何ものかを豫知してゐるやうだ。困憊しきつて居る。焚火の周圍には、もう昨日の様な活氣も
 なく、話聲もしなかつた。皆な寂しがつて、萎れかへつて居る。氣乗のしない話が、とぎれと
 ぎれに語られた。パンテレイは頻りに嘆息しながら、自分の足痛を訴へたり、横柄な死のこと
 を絶えず喋つたりして居た。

ドゥイモーフは腹這ひになつたまま、黙りかへつて藁を噛んで居たが、さもその悪臭に氣が

觸つたらしく、氣難かしい、悪びれた、疲れきつた表情をして居た……ワシヤは頭の痛い
 を訴へながら、明日の天候が悪からうと豫言して居た。澁面のエメリヤンは、兩手を振りもせ
 ず不動のまま坐つて、不興氣に焚火を見つめて居る。エゴールシカも疲れたらしい。ガタ／＼
 並足で揺られたのが、餘程こたへたと見える。日中焼きつけられたせいか、頭がズキ／＼痛ん
 で居た。

カーシヤが煮えた時分、ドゥイモーフは退屈の餘り仲間に対して突懸り始めた。

『坐つたと思ふと、もう癩奴が一番先に匙をもつて出しやばつて居る……』と、ドゥイモーフ
 は憎惡の眼でエメリヤンを睨めつけて言つた。『慾張奴！だもんだから、いの一前に鍋の側
 へ坐らうと、機會ばかり狙つて居やがる。歌手だつたからつて、それでもう、旦那にでもなつ
 た積りで居らア！ てめえの様な歌手が随分多勢、大道で憐みを乞ふて居らア！』

『何だ、てめえだつてへばり附いて居るくせに！』と、エメリヤンは憎らし相に、見かへつた。

『何だ、いの一前に、鍋の所へなんかやつて來やがつて、自分のこたあ、解らねえと見える。』

『馬鹿野郎奴、馬鹿つてえより外、言ひ様がねえや。』と、エメリヤンは嗚れ聲で言つた。

長い經驗に依つて、この様な話し合ひの結果がどうなるか位はよく知つて居るから、パンテ

レイとワシヤが仲に入つて、ドゥイモーフをたしなめた。

『歌手か、ハ、ハ、』と没分曉漢は却々鎮まらない。尙ほも冷笑しながら、『何だ、誰だつて歌位歌へらア。お寺の入口に坐つて、乞食のやうに「どうか、お恵み下さい……」とでも歌うがいい。何でえ、てめえ達もてめえ達だ！』

エメリヤンは黙つてしまつた。それが又ドゥイモーフを苛立たせるやうな結果になつた。そこで彼は益々赫つとして、向き直りさま、元の歌ひ手に言つた。

『何だ、口きかねえだか。きいて見る、懲らしめてやるから！』

『何だつて、しつこい奴だ。マゼツバ奴！』と、エメリヤンは嗚り返した。『てめえに俺が何しただ？』

『今、何んと云つた？』と、ドアイモーフは眞直に身を反らして問ひ返した。その兩眼は血走つて居た。『何アに？ おれがマゼツバだつて？ くそ！ てめえにやかうしてやる！ 行つて捜せ！』と、ドゥイモーフはエメリヤンの兩手に握つて居た匙を奪つて、遠く側の方へ投げつけた。キリユーハ、ワシヤ、ステブカの三人が跳ね起きて、それを捜しに飛出した。エメリヤンは祈る様に、また懇願する様に、バンテレイの方を凝視めた。その顔は俄かに小さくな

つて、微寄つて、瞬きし始めた。そして子供の様に泣きだした。

前々から、ドゥイモーフを憎んで居たエゴールシカは、今大氣が堪へきれない程息苦しくなつた上に、焚火が熱く頬を焼きつけたやうに感じた。で、彼は早く、暗の中の縦列の方へ走つて行きたかつたが、没分曉漢の意地悪い寂しさうな瞳に引きつけられた。そしてうんと一つ、馬鹿にしてやらうと、そればかり考へて、ドゥイモーフの方へ寄つて行つた。そして息せきながら言つた。

『お前は何でも一番の悪黨だ！ お前にやもう愛想がつかた！』と言ひ終つた後で、縦列の方へ逃げてしまはうと思つたが、まだ場所を離れないで言ひ續けた。『お前の様な奴は、死んだ先地獄で火責めにされらア、イワン・イワヌイチに言ひ付けてやるぞ！ よくもエメリヤンを辱しめたな！』

『いいとも、言へ、言へ！』と、ドゥイモーフはせせら笑ひながら、『豚の子奴、まだ俄鬼のくせに、餘計な口を叩いたな！ 耳でも引張つてほしいだか？』と、言ひ返した。エゴールシカは愈々胸が塞つて了つた。今迄こんな目に遇つたことはない。急に纏身を慄はせながら、ちだんだん踏んで鋭く叫んだ。

「彼奴、擲つちまへ！ 擲つちまへ！」

两眼からは、涙が迸りつて居る。侮辱されて、すつかり逆上した彼は、躊躇きながら縦列の方へ走つて行つた。今の捨棄詞が、どんな結果を生んだか。それをも顧みずにいきなり梱包の上に引つくりかへつて、泣きながら手足を蹴いて、

「お母さん！ お母さん！」と呟いた。

暖者の仲間も、焚火の廻りの黒い影も、眞黒な梱包も、遠くの方で殆んど一分おきに閃めいて居た電光も、今は悉く人間界のものでない恐ろしいものの様に思はれてならなかつた。薄氣味が悪くなつた。彼は落膽して自問した。どうしてこんなだらう。何んだつて見知らぬ土地へ、而も恐ろしい百姓の仲間入などしたんだらう？ 伯父や、フリントフォール神父や、デニスカは、今何處に居るんだらう？ どうして未だに見えないんだらう？ 僕のことを忘れて了つたんぢやなからうか？ いや運命のままに忘れられ、棄てられたのだ、と考へた時、彼はぞつとして愈々堪へきれぬ苦しさを感じたので、梱包の上から飛降りて、一目散に後ろも振り向かずにもと来た道を駆け出してやらうと、幾度か試みた。けれど、途中で眞暗な、あの恐ろしい十字架にぶつかるだらうと考へたり、遠方で閃いて居る電光が恐ろしかつたりしたので思ひ止ま

つた。……そして「お母さん！ お母さん！」と呟いた時だけ、何となく軽くなつた様な氣持がした……

暖者仲間も心苦しくなつたと見えて、エゴールシカが焚火の廻りから居なくなつた後で、長いこと黙つて居た。やがて小聲で曖昧に、例の奴が来るから早く支度してそれを遁れ様ぢやないかといふ様な話が始まつた。そこで急いで夕食を済まして、火を消した。皆な黙つたまま馬具を着け始めた。彼等の慌てた様子や、とぎれとぎれの話の文句に依て、何か災難でも豫知して居るらしく察せられた。

出發する前に、ドゥイモーフがパンテレイの方へ寄つて来て、靜かに訊いた。

「彼奴つア、何てえ名だ？」

「エゴール……」とパンテレイは答へた。

ドゥイモーフは片足を車にかけて、梱包を縛つた繩につかまつて上つた。エゴールシカがその顔と縮毛の頭とを見た時、顔は蒼白に、疲れきつて、眞面目くさつて居た。けれど、もう惡びれた表情なんか、現はして居なかつた。

「さあ、擲れ！」と、ドゥイモーフは靜かに言つた。エゴールシカは吃驚して、彼の方を見た。

丁度その時電光が閃めいた。

『構うもんか、擲れ!』とドゥイモーフは繰り返した。エゴールシカが擲るか、何か言ふか、それを待ち兼ねて、彼は下へ跳び降りて言った。

『あ、つまんねえなア!』

斯う言つて、ドゥイモーフは躊躇きながら、両肩を揺すり揺すり、物憂げに縦列に添つて歸つて行つた。泣くんでもなし、失望したのでもない、妙な調子で彼は繰り返した。

『つまんねえなア、眞實に! お前さん、あんまり氣にするなよ。ね、エメーリヤ。』とドゥイモーフはエメーリヤの側を通りながら言つた。『俺達の生涯は、墮落した、慘酷なもんだからなア!』

右手の方で電光が閃いたと思つたら、それがまた丁度鏡にでも映つた様に、遠くの方でも閃いた。

『エゴールイ、これお取りよ!』とパンテレイは下の方から、何か薄黒い大きな物を渡さうとして叫んだ。

『何んだ、そりや?』と、エゴールシカは訊いた。

『席だよ! 雨が降るだからお被りな。』と、パンテレイは言つた。

エゴールシカは半ば身を起して、自分の周囲を見た。遠くの方は、際だつて暗かつた。そしてしつきりなく頻繁に、青白い光りで嘘の様に瞬きした。重みの加減だらうか、その黒みは少し右の方へ傾いてゐた。

『爺さん、夕立でも来るのか。』とエゴールシカは尋ねた。

『あゝ、俺の兩足はえらく痛む、すつかり冷えちやつた!』と、パンテレイは聞きもせず、物憂相に言つて、兩足で地面を踏鳴らした。左の空で、誰かマツチでも擦つた様に、青白い燐光の一線が瞬間に閃いて、すぐに消えた。何處か遠くの方で、誰かブリキ張りの家根の上を踏み鳴らしながら歩く様な響がした。丁度屋根を蹴足で下タバタ歩いたと思はれる様に、ブリキが鈍く鳴つた。

『夕立がやつて来るぞ』と、キリニューハは叫んだ。

野 遠くの方と、右手の地平綿との間で、電光が閃いたので、曠野の一部と、晴れた天と、暗闇との境目とが、パツと明るく光つた。恐ろしい眞黒な雲が、濃く隙間のない様に固つて、緩かに動いて居る。その一端からは、大きな黒い襤褸が垂れて居た。それが互に壓しつけ合つて、

右と左の地平線上に擴大して行つた。此の破れた、ぼろ／＼の形が、其の眞黒な雲に、何となく泥酔者の様な不態な表情を添へた。もう雷鳴も曖昧さを通り過ぎて、ハッキリ鳴り出した。エゴールシカは十字を切つて、急いで外套を被り始めた。

『つまんねえなア！』と前方の荷馬車から、ドゥイモーフの叫び聲が聞えて來た。

其の聲に依つて、彼が如何に悪びれ始めたかが判断出來た、『つまんねえなア！』とまた聞えた。俄かに風が吹き出した。もう少してゴエールシカの包と蓆とをさらつてしまひ相だつた。驚いた蓆は、四方へ飛び跳ねて、梱包やエゴールシカの顔をバタバタ打つた。風は唸つて、曠野を駆つて行つた。無態に巻きながら、烈しく草を騒がせた。その音で、雷鳴も、車の軋りも、全く聞えなかつた。風は塵の雲を運びながら、雨や濡れ土の臭ひを送りながら、眞黒な雲から吹いて來た。月の光は朦朧として、愈々濁り始めた。星は益々顔を撃めた。埃の固りと其の影とが、街道の端に添つて、何處か後方へ急いで行くのが見える。屹度旋風が大きな渦を巻きながら地上の埃や、乾草や、羽毛などをさらつて大空へ上つて行つたのだらう。そして黒雲のすゞ側を、枯草の固りがコロ／＼と轉がつて行つたに違ひない。高い所で定めし眼を廻したであらう。けれど吹きつけた埃の爲に塞がれて、僅かに電光の閃きを見ただけだつた。

エゴールシカは今にも雨が降り出すだらうと考へて、跪づいたまま蓆を被つた。

『バンテレイ！』と誰か前の方で叫んだ。『ア——オ——！！』

『聞えやしねえ！』とバンテレイは大聲で長く引つ張つた。

『ア……オ……！ アレ……ア！』

雷は怒つた様に、轟き始めた。天上を右の方から左の方へ轉がつて、それから更に引き返して來て、先頭の馬車の邊りで鳴り止んだ。

『桑原、桑原、桑原！ あゝ神様！』と、エゴールシカは十字を切りながら囁いた。『天と地とに汝の光榮を滿させ給へ……！』

天界の暗黒は口を開けて、白色の火を吐いて、一息したと思ふと、また雷が轟き始めた。それが鎮まりかけると、電光が大きく閃いた。エゴールシカは其瞬間に蓆の隙間から殆んど街道の果までも、それから残らずの馭者や、キリューハのチョツキまでも見た。黒色の盤礎は、左の方からもう上空へ上りつつあつたが、其の中の不作法な、不細工な、丁度獸の足に似た一つが、月の方へ延びて居た。エゴールシカは堅く眼を閉ちて、氣を散らさない様にして、早く何とか片がつくのを、待たうと決心した。

雨はどうしたか却々降り出さない。エゴールシカはもう黒雲が通り過ぎたらうと思つて、席の穴から覗いて見ると、喫驚する程暗かつた。パンテレイも、梱包も自分の身をも認めることが出来なかつた。最前月の見えて居た方へ身を傾けたけれど其處も荷馬車の上と同じ様に眞暗だつた。暗黒中の電光は殆んど眼が痛い程眩しかつた。

「パンテレイ！」と、エゴールシカは呼んだが返事がない。風はたうとう席を奪ひ取つて何處へか走り去つた。單調な穏やかな騒音が聞えて居た。大きい冷たい雫がエゴールシカの膝の上に落ちて、他の一滴が片手を傳つた。彼は自分の兩膝が被はれて居ないのに氣がついたので席を直さうとしたが其時何だか降り出した。街道の上でボタバタ鳴り出したが、間もなく轅木や梱包を叩き初めた。雨に相違ない。雨と席とはさも互に理解し合つた様に、何事かを早口に愉快相に二羽のかささぎの囁り合ふ様に愈々うるさく話しだした。

エゴールシカは跪ひざまづいて居たが、寧ろ長靴の上に坐つて居たとでもいつた方がよいかも知れない。雨が席を叩き始めた時俄かに濡れ出したので、兩膝を庇ふ爲めに胴を前方に傾けて、漸く兩膝を覆ふことが出来た。が、其代り一分も経たないうちに鋭い不快な濕氣が背中の下の方とふくらはぎの上で感じられた。そこでまた以前の姿勢に歸つたが兩膝はまた雨で濡れる。仕

方無しにどうかして席を暗の中で直さうと考へたが兩手はもう濡れて居る。袖の中へも襟の中へも水は流れ込んで居るし、兩肩はすっかり凍えて居るので、どうにもかうにも仕様がな。此儘動かすに凝つと坐つて、雨の止むのを待つより外に仕方がないと覺悟した。

「桑原！ 桑原！……」とエゴールシカは呟いた。

俄かに彼の頭の眞上で、恐ろしい耳を聳するばかりの烈しい音をして空が裂けた。今にも後頭部や背中へ破片が落ちて来やしないだらうかと心配しながら、縮こまつて息を殺して居た。思はず眼を開けた時、彼は自分の指先や、濡れた袖や、席から傳はる流れや、梱包の上や、又地上で、眩しい強い刺すやうな閃光が五回程瞬いたのを見た。前と同じ様な強烈な恐ろしい打撃が鳴り響いた。天上では最早鳴動を聞かなかつた。只乾いた木の裂ける様な音ばかり聞えて居た。「バリ、バリ、ピー、ゴロ、バリ、ピー」と雷は明瞭に金屬類を打出す様な音がしたが、天井を轉けて踏いたらしい。何處か前の方の荷馬車の附近か、遠く後の方で、斷々つたつたの照びれた「バリ、……」の音と共に崩れ落ちた。

野 電光も以前は單に恐ろしいだけだつたが、今の様な雷鳴の際にはそれが更に不吉なもの様に感じられた。魔のやうな此の光りは閉ぢた臉をも透き通して、冷い感じが全身に染み渡つた。

エゴールシカはそれを見まいと考へた揚句、顔を後ろに反向しようとした。さも監視でもされて居るもの様に、びくびくしながら四ん道ひになつて、掌を濡れた梱包の上で滑らしながら、グルツと後ろへ回轉した。

「ゴロ／＼ゴ、バリ／＼ピー」と又しても雷はエゴールシカの頭上を駈けつけて、荷馬車の下へ落ちて破裂した。「バリ／＼ピー」

思はず兩眼を開けた時、エゴールシカは新たな危険を目撃した。荷馬車の縦列の後から長い槍を提げた巨漢が三人歩つて來るのだ。電光は其の槍先で閃いて兇漢の影を明瞭照らし出した。それは體の大きな男達で、覆面して頭を垂れて重さうな歩きつきをして居た。如何にも悲しげな失心した、深く思案にくれた人達の様に見えた。若しかすると、別段縦列に危害を加へようとして居るのでは無いかも知れぬ。兎に角近く後からやつて來るのが如何にも恐ろしかった。

エゴールシカは逸早く前方に向き直つた。そして總身を震はせながら叫んだ。

「パンテレイ！ 爺や！」

「ゴロ／＼ゴ、バリ／＼ピー」と天が彼に答へた。

何處に馭者達は居るだらうかと思つて眼を開いた。電光は二ヶ所で閃いた。街道の遠い果と、全縦列と、馭者全體とが照らし出された。街道の上を小川が流れて、水玉が跳ねて居た。パンテレイは馬車の側を歩いて居た。彼の高い帽子や兩肩は小さな席で被はれて居たが、別に心配相にも見えなかつた。雷鳴で馭者になり、閃光で盲者になつたかの様であつた。

「爺さん、巨漢だよ！」とエゴールシカは泣きながら彼に向つて叫んだ。

だが、老爺には聞えなかつた。その先の方をエメリヤンが歩いて居る。大きな席で頭から足の先まで被はれた形状は全く三角形だ。何にも被らないワイシヤは、相變らず足を高く上げて膝を延したままデスク式な歩き方をして居た。電光の閃いた時、縦列は止まつてしまひ、馭者達は凝固つて了つて、ワイシヤの上げを片足は其儘感覚が無くなつた様に見えた……

エゴールシカはもう一度老爺を呼んだが、もう返事も持たずに坐つた儘動かなくなつた。もう體氣に雷の止むのを待つてなど居られなかつた。今にも雷に撃たれるだらう、うつかり眼を開けたら恐ろしい巨漢を見るだらうと思つて居た。彼はもう十字も切らなければ老爺を呼びもしない。母の事も考へない。只冷氣と雷雨が何時までも續くものと觀念して硬張つて了つた。すると俄かに聲がした。

エゴリーイ、お前眠つてるだか、どうしただ？」と、パンテレイが下の方から呼びかけた。
 「下りろよ！ 野者さん！ 鈍間だなア……」
 「えれえ雷雨だな！」聞き慣れぬバスが言ふた。さも上等なウオーツカでも一杯引つかけた様に咳拂ひした。

エゴルシカが眼を開いた時、荷馬車の傍にパンテレイと三角形のエメリヤンと巨漢とが立つて居た。今巨漢は餘程低くなつて見えた。エゴルシカが覗き込んだ時は槍で無く、鐵の草摺きを擔いた普通の百姓だつた。パンテレイと三角形の間に低い農家の小窓が明るくなつて居た。荷馬車の縦列は今村の中で止つたのだ。エゴルシカは席を脱ぎ捨て、包を抱へた儘荷馬車を急いで下りようとした。今は側で人が語り合つて居るし、窓は明るく光つて居るので、彼はもう安心した。依然として烈しい雷鳴がしたり稲妻が天上を走つたりしては居つたが、もう恐ろしくはなかつた。

『いい雷雨だ。何でもありやしねえ……』と、パンテレイが呟いた。『まあ安心だ……雨の爲に足が少しゆるんだ様だが大したこたあねえ……エゴリーイ降りたか？ さあ農家へ入れ……心配しねえでい……』

『桑原、桑原、桑原……』と、エメリヤンは唖れ聲を立てた。『何處かでしつきりなしに雷が鳴つてらア……皆さん土地の御方でござえやすか？』と巨漢達に問ふた。

『いや、グリノウォから参りやした。グリノウォの者ですが、ブラーテルの且那の處で働いてゐるだ。』

『麥でも打つてるだか。』

『色々やつてますだ。小麥を刈り取る暇もねえですが。魂消た電光ですがすな。随分久しい事こんな雷雨にや出遭はねえでした……』

エゴルシカは家に入つた。憔悴した個體の頭の尖つた婆さんが迎へてくれた。婆さんは兩手で蠟燭を一本持つて居た。瞬きをしたが長い溜息をついた。

『えらい、まあ、雷雨だつたね！』と婆さんは言つた。『ああ、家の者達は野良に宿つて居るだが、定めし困つて居るだべ！ さあ、すつかり脱ぎな、脱ぎなよ……』

エゴルシカは冷えて震へて居る。いやに縮こまりながら濡れた外套を脱いで、それから兩方の手足を長く擴げた儘長い事動かなかつた。一寸動いても濕つばい冷えた厭な感じが襲つて來るからだ。下着の袖も背中もビショ濡れた。ズボンに足に粘り着いて居る。頭からはボクボ

夕水が流れる……

「どうしてだよ、鰻足みた様な恰好で突つ立つて。さア、こゝへ来て、腰かけな！」と、婆さんが言った。

エゴールシカは長く兩足を踏ん張つたまま、卓の方へ近寄つて、誰かの頭の側に横たはつて居た長椅子に腰かけた。頭は動き出した。鼻から長い息を吹さ出した。それから口をもぐもぐやつて鎮まつた。頭の側の腰掛には、羊の半外套を引つ被つた小山が長く延びて居た。とある百姓女が睡つて居たのだ。

婆さんは溜息つさながら出て行つたが……間もなく水瓜と甜瓜とを持って戻つて來た。

「さあお食べな！ 外に何も上るものが無いので……」と、婆さんは欠びしながら言った。それから卓の引出を捜して長い鋭利な庖丁を取り出した。宿屋で盜賊が商人を斬つたといふあの刀にひどく似て居つた。「さあお食べな！」

エゴールシカは丁度熱病にでも罹つた様に震へながら、胡瓜の一片と黒パンとを一緒に食べた。それから水瓜の一片をも食べた。其爲に一層寒さを増した。

「家の者達は野良に宿つて居るだ……」婆さんは食べて居る間嘆息を吐いた。「心配でなんね

え……聖像にお燈明を上げなけりやならねえだが、ステパニードは何處へ行つちまつただか。お食べな、さあ食べなよ！……」

婆さんは欠びしながら右手を後ろの方へ投げやつて、左の肩を搔いた。そして言った。

「もう二時頃だべな。直きに又起きなきやなんねえだ。家の者達は野良に宿つて居るだ……定めし皆な濡れちまつたらうなア……」

「お婆さん、僕睡むいんだよ。」と、エゴールシカは言った。

「横になん、さあ横になん……」と、婆さんは欠びながら嘆息した。「お、神様、基督様！ さうだ、私眠つて居たら、誰か戸を叩くだ。それから起きて見たら、この雷雨だ、……お燈明を上げようとしたが蠟燭が見當らねえだ……」

婆さんは獨語を言ひながら、長椅子から襦袢の様な物を引つ張つた。多分自分の寢具なんだらう。それから暖爐の側の掛釘から毛衣を二枚外して來て、エゴールシカの爲めに敷いてやつた。

野 「雷雨は鎮まりさうもねえ……」と婆さんは呟いた。「困つた事になつた。家の者達は野良に宿つて居るだ……横になつて……さあお寝み……よく眠れる様になア、いい兒だ……胡瓜もこ

の儘にして置くから、目が覺めたら食べてお終ひ！」

婆さんの嘆息と欠び、眠つて居る百姓女の正しい息づかひ、農家の薄暗さ、窓を打つ雨の音、それ等が頻りに睡りを誘ふた。エゴールシカは婆さんの前で着物を脱ぐのがきまり悪かつたので、只長靴だけ脱いで横になり、羊の皮の毛衣に包まつた。それから一分ばかりして、

『坊ちゃん、寝たかい？』と、パンテレイの低い聲が聞えた。

『寝だよ！』婆さんは小聲で返事した。『桑原、桑原、桑原！ あんなに鳴るばかりで、何時になつたら止むだか……』

『直きに止むだよ……』と、パンテレイは腰を掛けながら唸れ聲で言つた。『少しは靜まつた……皆な別々に幾個かの農家に行つて、二人だけ馬の所に残つて居る……皆な……いや、いけねえ……馬を連れて行かれつちまう……少し休んだら又交代に行つてやらう……いけねえ……連れて行かれつちまう……』

パンテレイと婆さんはエゴールシカの足許に並んで腰かけた。そして嘆息と欠びとを雜ぜながら低い唸れ聲で話し合つて居た。エゴールシカはどうしても暖まれなかつた。彼の上には暖い重い毛衣が載つて居た。けれども全身が震へて手足が痙攣つた。内臟までワナワナ震へて居

る……毛衣の下で着物を脱いで見たが、何にもならなかつた。寒氣は益々烈しくなるばかりであつた。

パンテレイは交代に去つた。そして又戻つて來た。エゴールシカは依然眠れなかつた。全身を震はせて居る。頭と胸とが嫌に壓しつけられた。それが老人達の囁きの爲だか、或は羊皮の重つたるい臭氣のせいだか解らなかつた。食べた水瓜と胡瓜の爲に口中不快な金屬性の味がした。おまけに蚤までが喰ひ初めた。

『爺さん！ 寒くて仕様がねえよ。』と、エゴールシカは言つたが、自分の聲さへ辨へられなかつた。

『眠なよ、いい兒だ、眠なよ……』と婆さんは嘆息を吐いた。

細い足をしたテイイトが寢臺の方へ寄つて來て、兩手を振つたと思ふと、延びて天井まで達した。すると製粉場に變つて終つた。フリストフォール神父は馬車の中で見たのと違ふゆつたりした着物を着て、灌水刷毛を片手に製粉場の周圍を歩きながら聖水をそれに振りかけた。すると風車が動かなくなつた。

エゴールシカは之が夢幻だと知りながら眼を開いた。

「爺さん！ 水をおくれ！」とエゴールシカは叫んだ。誰も返答するものがない。エゴールシカは堪へ切れぬ程息が苦しくて、もう横になつて居られなかつた。彼はムツクリ起き上つて着物を着た。そして農家を出た。もう朝だつた！ 空は曇つて居たが雨はもうやんで居た。エゴールシカは濡れた外套に包つて、震へながら汚い庭を通り過ぎた。そして朝の静けさに耳を欲てた。藪で作つた小さな家畜小屋が眼についた。其扉が半分開いて居た。彼は其中を覗いて見た。そして其の中へ入つて暗い隅の寢薬の上に腰掛けた。

重たい頭の中では色々考へがこんがらがつた。口中は乾ききつて金属性の味がするので氣持が悪かつた。自分の帽子を眺めて居たが、其上に附いた孔雀の羽毛を直しながら、母と一緒
に帽子を買ひに行つた時の事を思ひ浮べた。片手をポケットに押込んで、そこから粘りつこい褐色のセメントの塊りの一つ取り出した。どうしてこの塊りが彼のポケットの中へ入つたのか、暫く考へた。嗅いで見ると蜂蜜の匂ひがした。ああ、これはユダヤ人の薑餅だ！ 何だ、ケチだなど、濡れて柔かくなつちやつた！

今度は自分の外套を眺め始めた。鼠色で大きな骨製の釦が着いて居る。フロック型に縫ひ上げられたものだ。如何にも新らしい高價な品物の様に自宅で取扱つて居た。決して取次の間に

掛けつばなしなどせず、必ず寢室に持つて行つて母の衣類と並べて掛けられた。祭日の外には着せられなかつたものだ。それで今急に惜しくなつて來た。自分も外套と共に同じ様な運命に投り込まれた事を思ひ出した。兩方とも二度と家へは戻れないだらうと考へて、殆んど寢薬の上から轉げ落ちんばかりに歎息した。

雨に濡れた大きな白犬が、あげ巻き用のしめ紐に似た毛を顔に垂れて、家畜小舎へ入つて來た。ものすきにエゴールシカを見つめて、吠えようか止めようかと考へて居るらしかつたが、吠える必要はないと決めて、エゴールシカの側へ用心しながら寄つて來た。そして生薑餅を食べたら直きに出て去つて終つた。

「こりや、ワルターモフの仲間だ！」と誰か往來で叫んだ。

エゴールシカは泣きつくして家畜小舎を出た。水溜を廻つて往來に出て見た。丁度門前の往來に荷馬車が止つて居た。穢い足をした、びしょ濡れの馭者等は秋の蠅の様に萎れかへつて、睡む相な恰好して、其の側をぶらついたり轎木の上に腰掛けたりして居た。彼等を見たエゴールシカは「百姓なんてものは如何にも退屈な自由のきかぬものだ」と考へた。彼はバンテレイの方へ寄つて行つて、彼と並んで轎木に腰掛けた。

「爺さん、寒くて仕様がないうよ！」とエゴールシカは震へながら両手を袖の中へ押し込んだ儘言つた。

「まあいいや、直きに目的地へ着くだから。」とパンテレイは欠しながら言つた、「まあいいや、直きに暖くなるだから。」

荷馬車の縦列は朝の涼しい中に出發した。エゴールシカは梱包の上に寝轉がつて震へてゐた。太陽が間も無く空に現れて、濡れた衣物も梱包も土地も乾き始めたが兎に角冷かつた。漸く眼を閉ぢたかと思ふと又タイトと豊粉所とが浮んで來た。吐氣を催したり全身が重たるく感じられたりしだすと、全身を振つて其等の幻影を振り落さうとした。其等が消滅するかと思ふと、今度は液分曉漢のドワイモーフが赤い眼をして、兩拳を振上げて、唸りながらエゴールシカに飛びかかつて來たり、「つまんねえなア！」と無聊がつて居るのが聞えて來たりした。またコザツクの小馬に跨つたワルラーモーフが現はれたり、幸福なコンスタンチンが野鴨を持つて微笑しながらやつて來たりした。そして是等の人々は、如何にも揃ひも揃つて重つたるい、堪へきれない嫌氣のさした人達ばかりだつた。

或時——それはもう夕暮れ近かつたが——彼は水が欲しさに頭を上げた。荷馬車の縦列は廣い河に架した橋の上止まつてゐた。見ると下の方の川の面には煙が暗く立ち籠めて居る。そしてそれを透して汽船が一艘見えた。それは荷船を引いて居た。前の方の川向ふには家や會堂が疎らになつて並んで居る。大きな山も見えた。山の麓では貨車の附近を機關車が一つ走つて居た……

エゴールシカはこれ迄一度も汽船や汽車やこんな廣い河などを見た事が無かつた。今其等を眼の邊り見たのだが、喫驚もしなければ不思議にも思はなかつた。彼の顔には何等好奇心らしい影も認められなかつた。彼は只眩惑を感じて居た。そこで急いで梱包の端に俯向かうとしたが、とうとう嘔吐した。之を見たパンテレイは咳拂ひしながら頭を振つた。

「俺等の小僧が病氣に罹つただ。」と、パンテレイは言つた。「きつとお腹を冷しただよ……小僧が……旅先ではあり……困つたこつだ……」

野 荷馬車の縦列は阜頭から遠くない商人宿で止つた。エゴールシカは馬車から降りる時分聴き慣れた人の聲を耳にした。誰かが彼の降りるのを助けながら言つた。

「あゝ俺達わがたちはもう昨日の夕方着いたよ……今日は一日お前達を待ち明かしたよ。昨日お前達を追ッかけて見ようかと思つたよが、道が分らんかつたもんで、別な道を行つちまつたよ。あ、何んだつてこんなに外套をグチャ／＼にしただ！折角伯父さんがお前さんに買つてやつただに！」

エゴールシカは、話して居た人の大理石の様な顔を覗き込んだ時、そのデニスカだつたことに気がついた。

「伯父さんもフリストフォール神父も今部屋に居なさるだ。」とデニスカは續けた。「お茶を飲んで居なさる、さア一緒に行かう！」

彼はエゴールシカを大きな二階建の本館へ連れて行つた。それは暗い、陰氣な、丁度N市の病院に似た建物だつた。玄關を入つて、暗い階段と細長い廊下とを通つて、二人は小さな部屋に入つた。茶卓にはまぎれもないイワン・イワヌイチとフリストフォール神父とが坐つて居た。エゴールシカを見た老人二人の顔には驚愕と喜悅とが現はれた。

「あゝあ、エゴール・ニコライイチ！」と、フリストフォール神父は歌ふ様な調子で言つた、「ロモノソフ君！」

「さす日那衆！どうぞこちらへ！」とクジミチョーフは調しらべふやうに言つた。

エゴールシカは外套を脱ぎすて、伯父とフリストフォール神父の手に接吻して茶卓に就いた。「だが、途中どうだつた。好い見だなア。」と、フリストフォール神父は茶を注いでやりながら、また何時もの様に明朗な輝かしい微笑を湛へながら色々の質問を浴びせかけた。「定めし退屈だつたらうな。荷馬車に乗つて旅するのは牛に乗つて旅する様なものだ。いくら行つても行つても曠野といふ奴ア少しも變化がないからな。廣くうねうねして居るばかりで、限界など見たくつても見えやしねえ！旅行でも何でもありやしねえ。寧ろ苦痛だよ。エゴール！何故御茶を飲まねえか、飲みな！お前が着くまでに仕事は皆んなきれいに片附いてしまつたよ。巧くいつたよ！獸毛はチェレペーヒンに賣り渡したよ。ほんとうに、うまい儲けをしたよ。」

初めて自分に近しい人たちを見たエゴールシカは、訴へてやる、言ひつけてやると、烈こしく氣がせいいてゐたので、フリストフォール神父の言ふことなど聴きもせず、何から言ひ出さうか、中でも何を訴へてやらうかと夢中になつて居た。なのに、フリストフォール神父の不快な、鋭い語調の爲めに精神の統一を妨げられて、頭の中が愈々コンガラがつて了つた。坐つて五分間も経たないのに、もう席を起つて寢椅子の方へ行つて、横になつた。「如何したよ！」とフ

リストフォール神父は變に思ひながら、『お茶を飲まねえだか？』

何を訴へてやらうかとそればかり考へ込んでゐたエゴールシカは、額を長椅子の倚り掛りの所に伏せて、俄かに歎息いげんき始めた。

『如何したゞよ？』とリストフォール神父は起つて行つて繰返した。『エゴーリイ、お前如何かしたのか？ 何んだつて泣いたりするんだ？』

『僕……僕、氣持が悪いの！』と、エゴールシカは呟いた。

『病氣だつて！』と、リストフォール神父は眉を撃めた、『そりや困つたな……旅に出て病つたりしちやア！ アイ、アイ、お前も随分……アイ……』

片手をエゴールシカの頭の上に載せて、片頬を撫でやりながら、神父は續けた。

『然うだ、頭が熱い……屹度風邪をひいたんだ。それとも何にかの食あたりかな……さアお祈いのりしな！』

『キニーネを飲ませるがい……』とイワン・イワマイチは心配さうに言つた。

『いゝや、何か熱いものを食べさせたがい……』とエゴールシカは答へた。『お前スープを欲しかねえか？』

『い……いらない……』とエゴールシカは答へた。

『悪寒あくかんがするだか、どうだ？』

『以前には寒かつたけど、今……今は熱いよ……全身がズキズキする……』

イワン・イワマイチは寢椅子の方へ寄つて来てエゴールシカの頭を少し動かして見たが、心配さうに咳拂ひして、また茶卓の方へ戻つて来た。

『だから、しつかり着物を脱ぎ替へて、眞實まことに寝るがいゝよ。そしてグツスリ一寢入りしな！』

斯う云ひながらリストフォール神父は手傳つてエゴールシカの着物を脱がせてやつた。枕もやつた。掛蒲團かぶたんでくるんで尙ほその上にイワン・イワマイチの外套まで被せてやつた。それから爪先で軽く歩きながら茶卓の方へ行つた。眼を塞いだエゴールシカはもう部屋の中に居るのではなくて、廣い街道の上の焚火の側に坐つて居る様な氣持になり始めた。エメリヤンは片手を振つて居る。紅い眼のドゥイモーフは腹這ひになつて冷笑的な視線をエゴールシカの方へ向けて居る。

『彼奴、擲なつちまへ！ 擲ちまへ！』とエゴールシカは叫んだ。

『謔言たがひごと云つてゐる……』とリストフォール神父は小聲で呟いた。

『厄介なことになつた！』とイワン・イワヌイチは嘆息した。

『全身をバタと酢で塗りたくつてやるがい。屹度明日までにや癒るだらう。』

エゴールシカは苦しい幻惑から逃れようと思つて、眼を開けて見始めた。フリストフォール神父とイワン・イワヌイチとはもう十分にお茶を飲み終つて何か囁き合つて居た。フリストフォール神父は幸福さうに微笑んで居る。獸毛でうんと儲けたことを忘れぬと見える。だが、儲けが彼を嬉しがらせたといふよりは、寧ろ自宅へ歸つて自分の家族を大勢呼び集めて、狡猾相な騒ぎをして、哄笑してやらうといふ考へが彼を喜ばせたのだ。先づ皆んなに、獸毛を元値より廉く賣つて了つたと騙してやるんだ。それから婿のミハイルに膨らんだ財布を渡して、「さあお前にやる！ 仕事といふものはな！ 何んでも斯ういふ鹽梅にやらなげやならねえもんだ！」と言つてやるんだと、さう考へて居るらしい。

然しクジチーフは不満足らしかつた。顔面に相變らず打算的な忙はしさと心配とが浮んで居た。

『えー、若しチェレバールヒンがあんな値をつけると知つたら。』とクジチーフは小聲で言つた。『俺は自宅でマカローフなんかにあ三百布度を賣るんぢやなかつた！ 残念なこと

をした！ だけどこゝでこんないゝ値だとは誰も知らねえからなア。』

白い襦袢を着た男がサモワールを片付けて、隅の聖像の前の燈明に點火した。フリストフォール神父はその男に耳打ちした。男は解つた！ と、共謀者同志がする様な異様な顔付をして出て行つたが、暫らく経つて戻つて来て、長椅子の下に茶道具を並べた。イワン・イワヌイチは床の上に寢床を敷いて幾回も欠伸をして居たが、倦怠るさうに祈禱して横になつた。

『あゝ、明日は會堂へ行つて見よう。』とフリストフォール神父は言つた。『彼處に、知つて居る堂守が居る。大僧正の所へは禮拜を済ましてから伺はう、御不快で居らつしやるといふことだから。』

と、欠伸しながらランプを消した。今はもうお燈明ばかりがとぼつて居る。

『話に據ると、お會ひなさらねえと云ふことだ。』とフリトフォール神父が着物を脱ぎながら續けた。『それならお會ひせずに戻らう……』

彼がカフタンを脱いだ時、エゴールシカはロビソン・クルソーを聯想した。やがて此のロビソンは何か小皿の中にかき混ぜて居たが、エゴールシカの方へやつて来て、囁き初めた。『ロモノソフ、お前睡つて居るのかえ、起きるよ、バタと酢をお前に塗りつけてやるから。』

直きに效くからなア、お前はお禱祈さへすりやいゝんだ。」

エゴールシカは素早く起き上つて坐つた。フリストフォール神父は彼の膚衣を脱がせて、身を縮めてとぎれとぎれに息つきながら、さも彼自身も探つたい様に、エゴールシカの胸を擦つてやつた。

『父と子と聖靈の御名に依つて……』とフリストフォール神父は囁きながら言つた。『背中を上にして寝な……さうだ、それでいゝ。明日は屹度癒る。只是れからは悪いことしちやいけねえよ……丸で火の様だ！ 途中雷雨に遇つたらう？』

『遇つた。』

『これきり煩はぬ様に！ 父と子と聖靈の御名に依つて……これつきり煩はぬ様に！』

フリントフォール神父は塗り終つて再び膚衣を着せ、毛衣をかけてやり、十字を切つて、其所を去つた。やがてエゴールシカはフリントフォール神父が御祈禱して居るのを視つめた。爺さんは随分澤山の禱文を暗記して居たと見えて、長いこと聖像の前に立つて囁いて居た。祈禱を終つた時、窓や扉やエゴールシカやイワンイワヌイチに一々十字を切つてやつてそれから小さい長椅子の上に枕もせず横はつて、其の上に自分のカフタンを引つ被つた。廊下の時計は

十時を叩つた。エゴールシカは朝までまだ随分時間があるなと考へて、退屈の餘り長椅子の背中に押し當て、朦朧とした、壓しつける様な幻想から逃れようと努めた。が、夜は彼が思つたよりもすつと早く明け離れた。

彼は額を長椅子の背中に當て、少しの間積になつて居た積りだつたが、彼が眼を開いた時は両方の窓から床一面に斜な光線が射し込んで居た。フリストフォール神父とイワンイワヌイチとは見えなかつた。部屋の中は片附けられて、明るく、住心地よく、フリストフォール神父の臭がブーンとして居た。彼は何時もキパリス（樹の名）と乾した矢車草との匂ひを有つて居た（自宅で矢車草から瀧水刷毛と聖像の飾りとを造つて居たからその香が残つて居るのだ）。エゴールシカは、枕や、斜に射し込む日光や、長椅子の側に綺麗に掃除されて並んで居た自分の長靴などを見て笑ひ出した。梱包の上ちやなく、周囲はすつかり乾燥して居るし、天井を見ても電光や雷鳴の跡すらないのが奇異でならなかつた。

彼は長椅子から跳び降りて着物を着始めた。気分はもうすつかり直つて居た。僅かに兩脚と頸部に少しばかり衰弱を感じたばかりだ。バタと酔が餘程効いたものと見える。昨日籠ろに眺めたあの汽船や、機關車や、廣い河を想ひ出したので、早速埠頭に駆けつけてそれ等を眺めた

いと考へて、大急ぎで着物を着はじめた。顔を洗つて赤い襦衣を着た時、俄かに扉の鍵がガチヤ／＼鳴つたと思つたら、もう闔の上にフリストフォール神父が現れた。彼はシルクハットを被り、笏杖を持ち麻織のカフタンの上から褐色の絹の法衣を着て居た。微笑で輝きながら（會堂から歸つたばかりの老爺たちは何時も光輝を放つものだ。）卓の上に聖麵麴と、も一つの包物とを載せて、隣り終つたあとで、

『神様はお恵を垂れて下さつた！ さて身體の具合はどうだな？』と訊いた。

『何ともないよ！』とエゴールシカは彼の手に接吻しながら答へた。

『それは何よりだ……俺は今禮拜を済ませて来たよ……知己の堂守に會ふと思つて行つたのさ。その男からお茶に呼ばれたけれど辭つて来たよ。朝早く人の所へ呼ばれて行くのは好かねえからな。』

彼は法衣を脱いで胸を撫でながら緩つくり包物を開いた。エゴールシカは大粒なイクラ（魚卵）の入つたブリツキ箱と、蝶鮫の一片と、フランス麵麴とを見つけた。

『こりや鮮魚商の店の側を通つたから氣がついて買つて来たよ。』とフリストフォール神父は言つた。『口を可愛がるといふ譯ぢやねえ、家に病人が居たから買つてやらうと思つただ。イ

クラは上等だ、鱈魚の卵だ……』

白襦袢の男がサモワールと茶器を載せた盆とを持つて来た。

『食べるよ！』とフリストフォール神父はパンの片にイクラを塗りつけて、エゴールシカに與へながら言つた。『さう、今の中に食べな、遊びにも行つてきな。その中に季節が来たら勉強するんだぜ。氣をつけろよ、精出してね、後々の爲になる様に學問するんだ。暗記しなげやならねえものは暗で覚えてさ、自分で意味を話さなげやならねえものは、形式に觸れずと思つた通り話すんだ。どの課目も満足な様に骨折るんだよ。算術は優れて出来るがビョートルの墓に就て知らなかつたとか、ビョートルの墓に就ちや知つて居ても月の説明が出来なかつたりするものだ。お前はどれもこれも解る様に勵むんだよ！ ラテン語もフランス語もドイツ語も覚えてしまひなよ……地理も、歴史も、哲學も、神學も、數學も……あわてずにな、お祈りしながら段々と進んで行つて全部學び終つた時は、立派に勤める様にした。何んでも知つてしつた時は、どんな道を行つても容易いものだ。一生懸命に精出してな。天から授かる祝福を悉皆受けるんだよ。さうすりや、神様が何んな人になれと必ずお示し下さるに依つてな、醫者になれとか、裁判官になれとか、技師になれとか……』

フリストフォール神父は小さなパンの一片に、イクラを少し塗りつけてそれを自分の口へ入れて言った。

「使徒のパウエルが言つて居る、「怪しい改を學んではならぬ」と。だから巫術や、無駄話や、又サウルの様に彼世から亡霊を呼び出したり、或は自分にも人の爲にもならぬ様な學問なら一層の事學問なんかしねえ方がいい。だから神様が祝福なさるものだけを學ぶんだよ。お前も知つてる様に……使徒等は描つて何處の國語でもよく話せたものだ。だからお前も外國語を精出してやりな。大聖ワシリーイは數學と哲學とを學んだよ。だからお前もそれを學びな。聖ネストルは歴史を書いた——そこでお前も學問したら歴史を書くんだ。聖者達の事をよく考へて見るんだよ……」

フリストフォール神父は小皿の茶を吸つて、髯を拭いて、頭を揺つた。

『いゝかね。』フリストフォール神父は言つた。『俺は舊式な教育を受けた。それも、もう大概忘れてしまつたよ。だけど他人よりは違つた生活をして居るよ。比較するのもむづかしい位だ。例へば大勢寄つて食事する際とか、或は何かの集會の時に、ラテン語で話したり、或は歴史上のことや、哲學に關した事でも話さうものなら人々も愉快であらうし、自分も楽しみなものだ……或はまた地方裁判所などで宣誓しなけりやならねえ時分など、他の僧侶たちがどれも縮み上つて手が出せない時にも、俺は裁判官や、檢事や、辯護士等とお友達の様な積りになつてしまふんだ。學者らしい話もすれば、彼等と一緒に御茶も飲む、笑ひもする、知らぬことは訊きもする……彼等も愉快なのだ。まるで兄弟さ……學問は光明、無學は暗だとな。學問しな！勿論そりや容易なことぢやねえさ。今時や學問だつて、却々安くは出来ねえ……お前のお母さんは寡婦だ。恩給で生活して居なさる。それだから……』

フリストフォール神父は吃驚して扉の方見てまた再び小聲で續けた。

『イワン・イワヌイチが扶助してくれ。決してお前を見棄てやしめえ。自分の子供つてえものがあねえからな。お前をよく見てくれるだよ。心配することあねえ。』

彼は眞面目な顔付で、もつと小聲で囁いた。

『だが、お前氣をつける、グリゴリーイ、眞實になア！お母さんとイワン・イワヌイチを忘れちやいけねえぜ。母を尊敬せよとは十戒が教へて居る。イワン・イワヌイチはお前にとつちや恩人だ。お父さんの代りに見てくれるよ。だが、假令お前が學者にならうと、世間の人を自分より馬鹿な者と思つたり、輕蔑をしたりしちやいけねえぞ。油斷すると禍が来る、禍が！』

フリストフォール神父は片手を上げて、細い小聲で、
「禍が！ 禍が！」と繰り返した。

フリストフォール神父は盛んにお喋りした。奥に入ったと見える。この分ちや晝までかかつたつて終りやすまいと思つた時扉が開いて、イワン・イワヌイチが入つて来た。忙がし相に挨拶して、食卓に就いたと思つたら、急いで茶を飲み始めた。

「仕事は一切片付けて来た」とクジミチヨーフは言つた。「今日自宅へ歸らうと思つて。ところがエゴリーイの心配がまだ済まぬ。どうかしなけりやならぬえ。妹が、此の市のどこかに彼女の友達のナスターシャ・ベトロウナが住んで居ると云つたけ。だから若しかするとその方が自分の所へこの子を引き取つてくれるかも知れぬえ……」

クジミチヨーフは財布の中を捜して、揉みくちやになつた一通の手紙を取り出して読み上げた。

「マーラヤ・ニージュナヤ街、ナスターシャ・ベトロウナ・トスタノワ様。ご自宅に於て」とある。直ぐにも捜しに出かけにやならぬ、厄介だな！」

間もなく茶が済んでイワン・イワヌイチとエゴールシカとはもう商人宿を出かけた。

「厄介だな！」と伯父は呟いた。「お前は丁度、牛蒡の實の様に、俺につき纏つてゐる。一層お前を神様に全く上げつちもう……お前たちは、學問だ、家柄だといふけれど、俺はお前たちの爲めに、苦しんで居るばかりだ……」

二人が庭内を通り過ぎる時分には荷馬車も買者も、もう見えなかつた。彼等は朝早く、埠頭に出かけたのだ。庭内の遠い隅の方に見覚えのある乗用馬車が一臺あつた。其の傍で、栗毛の馬が立つて、燕麦を食べて居た。

「左様なら馬車！」とエゴールシカは考へた。

最初は久しいこと並木路に沿ふて丘の上に登つたが、それから更に大きな市場の廣場を通らなければなかつた。其邊でイワン・イワヌイチは巡查に、「マーラヤ・ニージュナヤ街は何所ですか」と尋ねた。

「何んだつて！」と巡查は苦笑しながら、「そりやまだ餘つ程ある、其所へ行くにや牧場の方へ出なくつちやア！」

途中、汁待の四輪馬車に出遇つた。けれど伯父が汁待馬車に乗らうなんて弱音を吐くのは、全く特別な場合と大祭日だけであつた。二人は久しく敷石道を歩いて居たが、今度は只人道は

かりの街に出た。その内に車道も人道もない様な街に出た。脚と舌とが漸くマーラヤ・ニージ
ユナヤ街まで彼等を導いた時兩人は眞赤になつて居た。早速帽子を脱いで汗を拭いた。

「一寸御尋ねしますが！」とイワン・イワヌイチは店の門口に腰かけて居た一人の老人に訊い
た。「ナスターシヤ・ベトロウナ・トスクノーフさんのお宅は何所でせうか？」

「この邊にはトスクノーフなんていふ家はない。」と、爺さんは暫らく考へた後で返事した。

「若しやティモシニコのことぢやないかね。」

「いえ、トスクノーフ……なんです。」

「御氣の毒だが、トスクノーフなんて此の邊にや居りませんよ……。」

イワン・イワヌイチは兩肩を窄めて、また歩き出した。

「いくら捜したつて解かるもんぢやねえ……。」と後方から爺さんが叫んだ。「無えと云つたら、
無えにきまつてらア！」

「一寸お尋ねしますが！」とイワン・イワヌイチは隅の方で果物臺に日向葵や梨子を賣つて居
た婆さんに訊いた。「この邊にナスターシヤ・ベトロウナ・トスクノーフさんの御宅はあ
りませんかア。」

婆さん怪訝な眼で、彼を覗き込んで笑ひ出した。

「ナスターシヤ・ベトロウナさんが今頃自分の家に住んでると思ひなさるの？」と婆さんは訊
いた。「大變だ！ 彼女が娘を嫁にやつて、その家を自分の婚に譲つてからもう八年にもなり
ますア……そこにや今婚殿が住んで居ますよ。」

そして彼女の兩眼は「何んだ、馬鹿な！ そんな事を知らねえだか」と云つてゐた。

「ぢや何處に、令其の方は住んで居ますか。」とイワン・イワヌイチは尋ねた。

「あらまア！」と手拍ちながら婆さんは驚いた。「彼女は、もうすつと以前から間借りをし
て居ますよ。もうあらかた八年になるでせう、自分の家を婚にやつてから。何んだつてまア、お
前さんは！……。」

婆さんは多分イワン・イワヌイチも自分と同じ様に驚いて、「そんなことがあつてたまるも
のか!!」とでも叫ぶだらうと豫期して居たらしかつた。が、クジミチョーフは極めて落着いて
問ふた。

「では、彼の方の住むは何處ですか。」

高ひ婆さんは袖を折り返して、露出した片手で其の方向を指し示しながら、つんざくやうな

細い聲で叫んだ。

「何んでも眞直に、眞直に、眞直に行きなさい……赤い小さな家を通り過ぎると左手の方に、横町がありますからな、其横町に入つて行くと右手に門があつて、その三番目の門が左様なんですよ……」

イワン・イワヌイチとエゴールシカとは其の赤い家の所まで来た。そして左手の横町へ曲つた。やがて右手の三番目の門にぶつかつた。頗る古い灰色の門の両側には大きな隙間だらけの灰色をした塀が長く列つて居た。右手の塀はひどく前の方へ傾いて居て今にも落ちさうだつた。左の方は反対に庭へ傾いてゐた。門は眞直に立つて居たが、前か後ろか、何方へ倒れようか思案中らしかつた。イワン・イワヌイチは耳門を開けてエゴールシカと一緒に入つた。ブリヤンヤ牛蒡杯が大きな庭一面にまつて居た。

門から百歩ばかりの庭に、赤い屋根の、雨戸の緑色な、左程大きくもない家が立つて居た。袖を折り返して、前掛をからげた、肥太つた女が庭の眞中に立つて居た。何か蒔きながら最前

の商ひ婆さんと同じ様に、細い、よく透る聲で、

「ツイブ！ ツイブ！ ツイブ！」と呼んで居た。

彼女の後ろには人參色の、尖つた耳を有つた犬が一匹坐つて居た。客人を見付けると、犬は

耳門の方へ走つて来て、テノールで吠え出した。(どの人參色の犬も皆なテノールで吠える。)

「誰方に御用ですか？」と、女は片手で眼を射す日光を遮りながら尋ねた。

「今日は！」と、イワン・イワヌイチは杖で人參色の犬を防ぎながら遠くから挨拶した。

「一寸御尋ね致しますが、此方にナスターシヤ・ベトロウナ・トスクノワといふ方がお住みでないでせうか。」

「それは私の事ですが、一體何の御用ですか？」

イワン・イワヌイチとエゴールシカとは近寄つて行つた。彼女は怪訝さうに二人を眺めながら、「何御用ですか？」と繰り返へした。

「では、あなたがそのナスターシヤ・ベトロウナさんでいらつしやいますか。」

「え、私がさうなんです！」

「いゝ處で御目にかゝりました……實は、かう云う譯なのです。あなたの舊い友達のオリガ・イワーノウナ・クニャーゼワから宜敷といふことでした。そしてこれが彼女の息子です。若しかしたら、覚えて居なさるかも知れませんが、私は彼女の兄に當るイワン・イワヌイチです。」

あなたは、それ、私共のN市のお方ぢやありませんか……あなたは私共の町で御生れになつて、それから御嫁に行かした……」

暫らく黙つて居た。肥つた女は何氣なく、イワン・イワヌイチを凝視めた。とても信ぜられないといつた様な、また了解らないといつた様な様子だつたが、急に全身を震はせて手を拍つた。前掛からは燕麥がふり蒔かれた。兩眼からは涙が迸り出た。

『オリガ・イワーノウナ！』と胸騒ぎの爲めに苦しい息づかひをしながら叫んだ。『私の仲好しだつた！ おや、坊ちゃんですね。まア何だつて、私馬鹿の様に、突つ立つて居るんだらう。まアお前さんは、なんて可愛い坊つちやんでせう……』

いきなりエゴールシカを抱きあげて、その顔をすつかり涙で潤ほしてしまつた。そのうちに眞實に泣き出した！

『神様！』と、彼女は両手を組みながら言つた。『これがオーレチカの子供！ まア嬉しいこと！ お阿母さんそつくりだわ。ほんとにお阿母さんの様だわ。何んだつて庭の眞中に立つて居なさるの。さアどうぞ部屋へいらして下さいな！』

泣きながら、嘆息しながら、又途中語り續けながら彼女は家の方へ急いで行つた。二人もそ

れに隨いて緩くり歩いて行つた。

『私のところはまだ取り片付けてないので！』彼女は客を、聖像と彩つた花瓶とで飾り附けられて居た小さい息の寒様な部屋へ案内しながら云つた。『あゝマリヤ様！ ワシリヤ、来て雨戸なり開けな！ 可愛い兒ねえ！ 繪の様な綺麗な兒だわ！ オーレチカの所にこんな男の兒が居ようとは夢にも知らなかつた！』

彼女が漸く落着いて兩人に慣れた時分、イワン・イワヌイチは彼女一人呼んで何か話さうとしたので、エゴールシカは他の部屋へ出て行つた。その室にはミシンの機械が立つて居た。窓の上には「むくどり」の籠が掛けてある。客間に在つたのと同じ聖像と花瓶とが澤山並んで居た。ミシン機械の傍に身動きもせず女の子が一人立つて居た。日に焼けて、テイトの様に膨れた頬を有つて居た。サツパリした更紗の着物を着て居た女の子は、瞬きもせずにエゴールシカを眺めて居たが、大變に氣まりが悪る相だつた。エゴールシカは女の子を見つめて暫く黙つて居たが、

『何といふ名前？』と聲をかけた。

女の子は兩唇を動かして、泣顔をした。そして靜かに、

『アーティカ……』と答へた。

これはカーティカの事だつた。

『彼の兒は、貴女の御厄介になるでせう。』とイワン・イワヌイチは客間で囁いて居た。『若し貴女さへ御承諾下されば、私共は月々十留づ、御拂しませう。彼は自宅でもあまやかしておかなかつたので、割に温順しいですよ……』

『さア、どう申し上げていゝか解りませんわ！』とナスターシヤ・ペトロウナは泣き相にして嘆息した。『十留はいゝお金ですけど、他人様の子供を預かるのは心配ですからなア！ 俄かに病氣にでもなつたり、また何か……』

エゴールシカが再び客間へ呼び戻された時、イワン・イワヌイチはもう両手に帽子を持つて立ちながら挨拶をして居た。

『如何しまして、では今から貴女の所へ残して参ります。』とイワン・イワヌイチは云つて、今度は、『左様なら！ 残るんだよ、エゴール！』と甥に向つて云つた。『甘つたれちやいけねえよ。ナスターシヤ・ペトロウナさんの言ふことを能く聽くんだよ……左様なら、俺はまた明日もう一度来るよ。』

ど、言ひ残して彼は去つた。ナスターシヤ・ペトロウナはもう一度エゴールシカを抱きしめてエンゼル、エンゼルと浴せかけた。そして再び泣きながら食事の用意に取りかかつた。三分ばかりたつとエゴールシカはもう彼女と並んで食卓について彼女の際限ない質問に答へて居た。そして脂ぎつた熱いシチー（スープの一種）を吸つて居た。

夕方再び同じ食卓に就いた。そして頭を片手に載せてナスターシヤ・ペトロウナの言ふ事を聞いて居た。彼女は笑つたり、泣いたりしながらエゴールシカの母親の若かつた時分の事や、自分が嫁に行つ當時の話や、自分の子供達の事杯を物語つた……ベーチカの中で、こほろぎが鳴いて居た。ラシブの心は辛つと聞える位な唸りを續けて居た。主婦は小聲で話して居つたが、心が亂れて絶えず指ぬきを落した。彼女の孫娘のカーチャはそれを拾ふ爲め卓の下に潜つて、永い事暗い所に坐つて居た。多分エゴールシカの足を眺めて居たのだらう。聞いて居たエゴールシカは居睡りを始めながら、婆さんの顔や、毛の生えた疣や、涙の跡などをじつと眺めて居た……が、何となく淋しくなつて來た！ 彼はトランクの上に寝かされた。若しも夜半に何か食べたくなつたら廊下に出て、其處の窓の上に載せてある、皿を被せた雞の肉をひとりで食べなと言ひ残された。翌朝イワン・イワヌイチとフリストフォール神父とが別れに來た。

ナスターシヤ・ベトロウナは喜んでお茶を沸かさうとした。が、大變急いで居たイワン・イワヌイチは片手を振つて言つた。

『お茶など戴いて居る暇はありません！ 俺等は直きに、お暇申します。』

離別の前に一同腰掛て一分間ばかり黙つて居た。ナスターシヤ・ベトロウナは深い溜息して、泣き脹れた眼で聖像を見た。

『さあ。』とイワン・イワヌイチは起ちながら、『ではお前は残るんだよ！』と言つた。

彼の顔からは忽ち打算的な無愛想の表情がとれて少しく赤くなつた。やがて悲し相な微笑を湛へて言ふた。

『よく氣を付けて勉強しろよ……母親を忘れちやいけねえぜ。ナスターシヤ・ベトロウナさんの言ふ事をよく聽くんだぞ……お前がよく勉強さへしてくりや、え、エゴール、さうすりや俺も決してお前を見棄やしねからなア。』

彼はポケットから財布を取り出し、エゴールシカの方に背を向けて久しく小錢を搜して居たが、漸く十錢銀貨を一つ見附けて、それをエゴールシカに與へた。フリストフォール神父は嘆息しながら徐かにエゴールシカを祝福した。

『父と子と聖靈の御名に依つて……勉強しろよ、骨折るんだぞ……俺が死んでも忘れちやいけねえ、さア、俺も十錢銀貨をやるから大事にとつて置きな……』

エゴールシカは彼の手に接吻して泣き出した。何だか知らんがもうこれつきり此の老人には遇へないやうな氣がした。

『ナスターシヤ・ベトロウナさん、俺はもう中學校へ願書を差出して置きました。』とイワン・イワヌイチは客間に死人でも居る様な調子で云つた。『八月七日になつたら彼を試験受けさせに連れて行つて下さい……ちや左様なら、皆さんお達者で。エゴール、左様なら！』

『一杯でもいゝからお茶を召上つて行つて下さいな……』と、ナスターシヤ・ベトロウナは呻き通した。

兩眼は曇る、涙は溜まる。エゴールシカはもう伯父とフリストフォール神父の出て行つた時の様子など解らなかつた。彼は窓の所へ飛びついたが、彼等の影はもう庭内に見ることが出来なかつた。門の方からは、人參色の犬が吠え終つて、さも自分の義務を果したと云つた様な表情をして歸つて來るところだつた。エゴールシカは何の爲めだとも知らず夢中になつて部屋から飛び出した。門の外へ駆け出した時、イワン・イワヌイチとフリストフォール神父とは、一

人は鉤の附いた杖を、一人は笏杖を振りながら角を曲るところだつた。エゴールシカは是まであつた色々の事が皆な煙の様に、是等の人々と一緒に、永久に消滅したものの様に感じた。彼は力抜けして腰掛に倒れかゝつた。そして悲しい涙と共に、今彼の爲めに始まつた新しい見知らぬ生活を迎へた……

この生活は果して何うなるであらう？



日本社

昭和二十一年六月二十五日印刷
昭和二十一年六月三十日發行

可愛い女 (日本文庫3)

定價二十圓

譯者 昇 曙 夢

發行者 東京都豊島区内幸町二ノ三、幸ビル 瀬尾 正男

印刷者 東京都豊島区国領ケ谷一ノ一二二六 大和印刷株式會社 田中末吉

發行所 株式會社 日本社

電話 銀座 (57) 五二六四番
八〇三八番

配給元 日本出版配給統制株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

日本文庫 刊行の辭

あたらしき日本はふかき知性と永遠の藝術性の探求の上に建設される。實に平和を愛好し、たかめられた文化教養を身づけるためには、我々は、意欲的な攝取によつて生々發展をはからねばならない。かくて廢城革命復興のケイオスの中にあつて、聳立し永遠不滅の生命を有する名著をえらび、「日本文庫」は刊行される。レバトリーはひろく文學藝術思想哲學經濟自然科學の全般にわたり、クラシックと現代、洋の東西を問はず、イデオロギーに泥をまき、眞に不朽の價値ある長書を上梓せんとするものである。

幸ひに新しき日本文化再建のために有識なる讀書人の協力を期待するものである。

- | | | |
|------------|----------|--------|
| ☆日本文庫 | 坊 ちやん | 夏目漱石著 |
| 草 | 枕 | 夏目漱石著 |
| 雁 | 森 鷗外著 | |
| ☆生れ出づる悩み | 有島武郎著 | |
| ☆カインの末裔 | | |
| ☆外 | ☆可 愛 い 女 | チエーホフ著 |
| ☆復 活(上下) | トールストイ著 | |
| ☆ドストエフスキー論 | 武者小路實光譯 | |

★ 郵對入手確保の爲に、送料を添へ小爲替にて本社へ直接御申込下さい。

日 本 社

(以下 続刊)



F 83
C 37
3

終



NIPPON